

## 2021 年度スポーツ庁委託事業

令和3年度「障害者スポーツ推進プロジェクト（地域の課題に対応した障害者スポーツの実施環境の整備事業）」

# 成果報告書

2022年3月  
（筑波大学）



# 目 次

1. はじめに	1
2. 本事業の概要	2
3. 事業実施者（プロジェクトメンバー）	7
4. 本事業内容	8
4-1. 事業実施の背景と目的	8
4-2. 定着研修会 WG	10
1) 活動概要	
2) 活動目標	
3) WG メンバー	
4) 活動内容	
5) まとめ	
6) 今後の課題	
4-3. ガイドブック WG	26
1) 活動概要	
2) 活動目標	
3) WG メンバー	
4) 活動内容	
5) まとめと今後の課題	
4-4. 広報 WG	37
1) 活動概要	
2) 活動目標	
3) WG メンバー	
4) 活動内容	
5) まとめと今後の課題	
5. 本プロジェクトにおける将来計画	45
6. 附録資料	46

# 1. はじめに

事業実施責任者 齊藤まゆみ

令和3年度「障害者スポーツ推進プロジェクト（地域の課題に対応した障害者スポーツの実施環境の整備事業）」は、障害者スポーツの実施に向けた教員に対する研修の実施（教員の障害者スポーツ指導員資格の取得促進のための取組を含む）を含む事業として進めて参りました。

私どもは地域における通常の小中高等学校の体育現場において、障害者スポーツ指導の基本である「アダプテッド体育・スポーツ（以降、アダプテッド）」の視点が定着することを最終目標とした長期計画をたてました。今年度は第1クール（2019年度-2021年度）のまとめとして、アダプテッドを教員に定着するための定着研修会プロトタイプをもとにした多様な研修タイプの効果を明らかにするとともに、その研修を通して、日常的にアダプテッドを実践するためのガイドブック内容の選定およびホームページの構築を成し遂げるなど、さまざまな制約のある環境においても着実にプロジェクトを遂行して参りました。まだ進行中のプロジェクトですので、得られた知見をみなさまにご活用いただき、ご意見を頂戴できれば幸いです。

本プロジェクトは、筑波大学と国内におけるアダプテッド体育・スポーツ学に関わる学術団体との有機的連携で進められました。この報告書には、スポーツを通じた共生社会の実現という社会的課題に応えるべく、大学の垣根を超えてスペシャリストが知恵を出し合い、さらにワーキンググループによる試行・実践を経た評価をもとに導かれた内容がまとめられています。地域における通常の小中高等学校の体育現場において、アダプテッドの視点が定着するための基礎資料として活用されることを期待しています。

最後になりましたが、本事業にご協力いただきました多くの方々に感謝いたします。

2022年3月

## 2. 本事業の概要

### 1) 事業目的

地域における通常の小中高等学校の体育現場において、障害者スポーツ指導の基本である「アダプテッド体育・スポーツ（以降、アダプテッド）」の視点が定着するという目標を達成するために、2019年から3年計画（2019年度-2021年度）をたて、「定着研修会コアカリキュラム」の試案、その検証をもとに作成された定着研修会のプロトタイプをもとに、さまざまな研修会の実施計画をたてて実施することが今年度の主たる目標のひとつである。また昨年度までの調査をもとに効果的なガイドブックのあり方が明らかになったことから研修会内容をより深く知るためのリンクを含めたガイドブックを発行し、実際の使用感について検証することにした。そして「アダプテッド」の周知に関しては、現場志向型のコンテンツ構造をもったHPの構築を行い、定着研修会内容やガイドブックの内容を深めるためにウェブページの充実をはかることもまた目標のひとつであった。

### 2) どのようなタイプの定着研修会であっても同様の効果を得られた。

定着研修会WGにより、「定着研修会コアカリキュラム」をもとに、研修会A（6時間）、研修会B（12時間）、研修会C（3時間）、研修会D（1.5時間）を設定し、各時間に応じた研修会の内容について、アダプテッド・センシティブ尺度（仮称AS尺度）を用いて検証を行った。その結果をもとに、各研修会において小学校の教員の意識の変化に着目し、研修会の設定や内容について検討したところ、概ね同様の効果を得られた。しかしタイプによって目標の設定を変更することや、中学校へのつながり、発達段階を想定した教材や事例内容をさらに検討していく必要性が指摘された。加えて、全国的に研修会を展開していく予定のなか、講師を担当できる人を確保していくこと、その人材を養成する仕組みについても課題であることが指摘された。

### 3) アダプテッドを理解する導入としての役割を果たすガイドブックが完成した。

ガイドブックWGにおいて、障害のある児童が在籍する小学校の体育授業を実践する際の困難さを解決するための研修会用のガイドブックを作成した。内容は「理論編」

と「実践編」の2部構成とした。特に「実践編」の作成では、見開きで1頁のレイアウトにし、障害種ごとに作成すること、単元を球技とし、アダプテッドのポイントを「もの」「ルール」「人」の3つにして、ステップを示し困り感から解決へと導くように構成した。また関連情報があるHPのURLとQRコードを加えることにした。

今後のガイドブックの方向性について検討を行うため、ガイドブックに関するアンケート調査を実施した。その結果、ガイドブックのシンプルな内容が一定の評価を受け、さらに内容を深めていきたいという回答が多く、アダプテッドを理解する導入としての役割を担っていることがわかった。今後の方向性について、ガイドブックが仲介役となり、定着研修会やHPの教材コンテンツとしてつながりを持ち、新たな単元の教材コンテンツを増やししていきたいと考えた。

#### 4) ガイドブックの内容と整合させた実践例を紹介する動画を作成しHPで公開した。

広報WGにおいて、国内における「アダプテッド」の社会的周知を目的に、今年度は主に、昨年度試行的に構築されたJimdo®の無料作成ウェブページを使ったHPのコンテンツについて、①ガイドブックとの整合性を図りながら、定着研修会で紹介、閲覧してもらえるように内容を充実すること、②作成した内容に対するフィードバックをもとにHPコンテンツの作成と編集、更新のマニュアルを作成することを優先的な課題として活動した。この課題を達成するために不可欠である動画編集やHP編集の技術に長けた者をWGメンバーに新たに加え、年間6回のWGミーティングを開催、検討を重ねるとともに、定着研修会WGとガイドブックWGとの連携を密にした。

結果として、コンテンツの対象学年、障害の種類、種目を絞り込み、それぞれの障害の特徴に合わせて、ガイドブックの内容と整合させながらアダプテッドした活動例を紹介する動画を作成しHPで公開した。また、HPは2月の定着研修会で参加者に紹介された。今後の継続的なHPの拡充と維持のための課題として、HPのコンテンツ作成者の増加、動画編集およびHP更新のための費用、HPを紹介する機会の獲得とHPに関するアンケート調査の実施があげられた。また、昨年度からの筑波大学特別支援教育連携推進グループとの連携を継続していく必要がある。

#### 5) 第2期計画を実行するとともに、自走するための将来構想の検討が求められた。

2030年の最終目標を達成するために実施した第1期3年計画（2019年度-2021年度）が完遂したことで、第2期3年計画（2022年4月-2025年3月）にすすめていきたいと考えている。第2期では、全国「大都市」に該当する20都市と東京都において、年間1回以上の定着研修会を実施することを目標とすることとした。そのうえで2022年度は、まずは全国を6ブロックの地域に分け、地域の小学校教員を主な対象に定着研修会を年に1回実施し、地域条件における実施上の問題と課題を明らかにしていきたい。そして学校教育現場でアダプテッドを日常的に実践できるための教材コンテンツの企画および開発を行わなければならない。そして、最終目標の達成に向けて自走するための準備をしていかなければならないため、本プロジェクトの将来構想について現実的で実現可能性のある検討が必要である。

# 本事業の概要

## 事業目的

地域における通常の小中高等学校の体育現場において、障害者スポーツ指導の基本である「アダプテッド体育・スポーツ（以降、アダプテッド）」の視点が定着するという目標を達成するために、2019年から3年計画（2019年度－2021年度）をたて、「定着研修会コアカリキュラム」の試案、その検証をもとに作成された定着研修会のプロトタイプをもとに、さまざまな研修会の実施計画をたてて実施することが今年度の主たる目標のひとつである。また昨年度までの調査をもとに効果的なガイドブックのあり方が明らかになったことから研修会内容とより深く知るためのリンクを含めたガイドブックを発行し、実際の使用感について検証することにした。そして「アダプテッド」の周知に関しては、現場志向型のコンテンツ構造をもったHPの構築を行い、定着研修会内容やガイドブックの内容を深めるためにウェブページの充実をはかることもまた目標のひとつであった。

# 本事業の概要

どのようなタイプの定着研修会であっても同様の効果を得られた

## 1. 活動概要

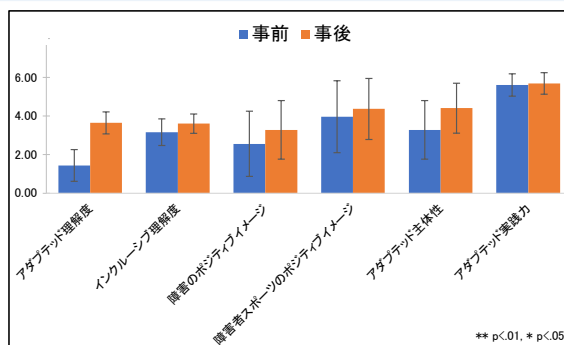
- 今年度は、昨年度の「定着研修会コアカリキュラム」をもとに、多様な研修会の時間に応じた効果的な研修内容の検証を行った  
→ 研修会A(6時間) 研修会B(12時間) 研修会C(3時間) 研修会D(1.5時間)
- 特に、**小学校の教員の意識の変化**に着目し、研修会の設定や内容について検討した

## 2. 研修会の内容

【講義】インクルーシブ体育の意義と理念 【演習】アダプテッド演習、インクルーシブ演習

## 3. 考察および効果の検証

全ての研修会において望ましい変化が確認された。**小学校の教員を対象とした校内研修**(研修会D; 1.5時間)では、**インクルーシブ演習を中心とした短時間用のカリキュラム**をもとに研修会を実施し、一定の効果が確認できた(図)。今後は、研修会の時間に応じた目標の明確化や扱う事例の検討を進めて行きながら、研修会を全国展開していく。



研修会D(Y小学校)における事前事後のAS尺度の変化



## 本事業の概要

アダプテッドを理解する導入としての役割を果たすガイドブックが完成した

### 1. 研修会用ガイドブックの作成

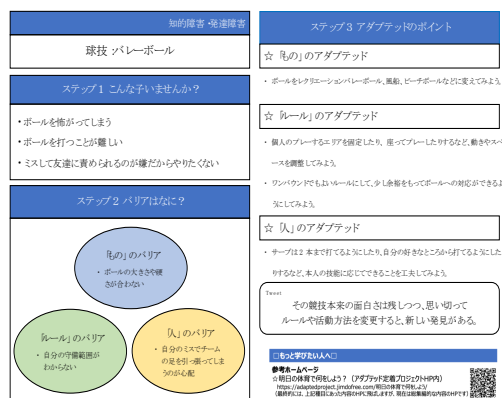
「理論編」と「実践編」の2部構成とし、アダプテッドへの入り口になるようシンプルな構成とした。視覚障害、聴覚障害、知的・発達障害、肢体不自由の категорияで整理した。アダプテッドのポイントを『もの』『ルール』『人』の3つとした。対象単元を球技(バレーボール、サッカー)とした。

### 2. ガイドブックの有効性に関する調査

研修会を実施した東京都の小学校26名の現職教員を対象に実施したところ、ガイドブックの内容をさらに深めていきたいとの回答が多く、ガイドブックがアダプテッドの入り口の役割を果たした結果であった。

### 3. ガイドブックの今後の方向性についての検討

研修会、ガイドブック、HPの横のつながりを大切にする。研修会のテキストとしてガイドブックを作成し、HPに公開する。ガイドブックの執筆を進めて単元のコンテンツを増やす。



ガイドブック「実践編」のレイアウト

## 本事業の概要

ガイドブックの内容と整合させた実践例を紹介する動画を作成しHPで公開した

### 1. 活動目標

2021年度試行的に構築されたHPコンテンツの拡充とHPコンテンツ作成、編集、更新マニュアルの作成であった。

### 2. 活動内容

定着研修会WGとガイドブックWGとの連携して、アダプテッド活動例紹介動画を作成し編集しHPで公開した（HPは以下を参照）。サッカー、バレーボールの種目に対して、障害種別（聴覚障害、肢体不自由、知的・発達障害）に編集した。またHPコンテンツ作成のためマニュアルを作成した。

<https://adaptedproject.jimdofree.com>

### 3. ガイドブックの今後の方向性についての検討

研修会、ガイドブック、HPの横のつながりを大切にする。研修会のテキストとしてガイドブックを作成しHPに公開する。ガイドブックの執筆を進めて単元のコンテンツを増やす。

第2期計画を実行するとともに、自走するための将来構想の検討が求められた

第2期3年計画(2022年4月-2025年3月)にすすめていきたいと考えている。第2期では、全国「大都市」に該当する20都市と東京都において、年間1回以上の定着研修会を実施することを目標とすることとした。

### 3. 事業実施者（プロジェクトメンバー）

- 齊藤まゆみ 筑波大学体育系 准教授（代表・実行委員会委員座長）  
松原 豊 筑波大学体育系 教授（実行委員会委員）  
澤江 幸則 筑波大学体育系 准教授（渉外担当・実行委員会委員・定着研修  
会 WG 委員・ガイドブック WG 委員・広報 WG 委員）  
凶子 美和 筑波大学体育系 非常勤事務員（事務作業担当）  
内田 匡輔 東海大学 教授（実行委員会委員）  
金山 千広 立命館大学 教授（実行委員会委員）  
藤田 紀昭 日本福祉大学 教授（実行委員会委員）  
吉岡 尚美 東海大学 教授（広報 WG 座長）  
阿部 崇 東京家政大学 准教授（ガイドブック WG 座長）  
天野 和彦 筑波技術大学 准教授（ガイドブック WG 委員）  
安藤佳代子 日本福祉大学 准教授（定着研修会 WG 委員）  
曾根 裕二 大阪体育大学 准教授（定着研修会 WG 委員）  
吉永 武史 早稲田大学 准教授（実行委員会委員）  
村上 祐介 順天堂大学 助教（実行委員会委員・定着研修会 WG 座長）  
綿引 清勝 いわき短期大学 講師（ガイドブック WG 委員）  
小沼 博義 茨城県立友部特別支援学校 教頭（定着研修会 WG 委員）  
萩原 大河 兵庫県姫路市立水上小学校 教諭（定着研修会 WG 委員）  
牧 舞美 兵庫県立阪神昆陽特別支援学校 教諭（ガイドブック WG 委員）  
宗田 光博 埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園 教諭（広報 WG 委員）  
今城 遥 聖カタリナ大学 助教（広報 WG 委員）  
重藤誠市郎 東海大学 非常勤講師（広報 WG 委員）

（2022年3月31日現在）

## 4. 本事業内容

### 4-1. 事業実施の背景と目的

障害者スポーツ推進プロジェクトの趣旨に基づき、スポーツを通じた共生社会の実現に向けて、日本各地において障害者が健常者と同様にスポーツを親しめるようにすることの実現が求められている。加えて、「第2期スポーツ基本計画」で指摘されているように、特別支援学校以外の学校に在籍する障害児も含めた障害児の体育・スポーツ活動についても、現状の課題や全学校種の教員向けの研修等の推進の必要性等が指摘されている。一方、それらを推進するためのリーダー的存在、つまり障害児のための体育、アダプテッド体育・スポーツやインクルーシブ体育・スポーツの視点や技術を、各地域の学校に定着していくための指導者(以下、講師)が不足していることが指摘されている。

そこでわれわれは、地域における通常の小中高等学校の体育現場において、障害者スポーツ指導の基本である「アダプテッド体育・スポーツ(以降、アダプテッド)」の視点が定着することを最終目標とし、2030年に、地域の通常の小中高等学校の少なくとも体育授業を担当している教員のうち、9割が障害のある子どもを受け持つことに対して抵抗感を感じず、8割が障害のある子どもに指導することに不安を感じないで、7割が「アダプテッド」の用語を聞いたことがあるなかで、6割が、アダプテッドの視点をもって指導できるという数値目標をたてた。

上記の目標を達成するために、2019年に3年計画(2019年度-2021年度)をたてた。2019年度は、アダプテッドの視点を定着するうえで必要とされるカリキュラムの試案を行ない、そのカリキュラムを使った研修会(定着研修会)の効果検証を行なった。2020年度は、新型コロナウイルス感染症対策によって縮小したものの、2019年度で効果が確認されたカリキュラムのプロトタイプを検証を行い、効果の安定性が確認された。また試験用に作成された模擬ガイドブックを使って、質問紙調査を行い、効果的なガイドブックのあり方が明らかになった。そして「アダプテッド」の周知に関しては、現場志向型のコンテンツ構造をもったHPの構築を行った。

そして2021年度は、1)定着研修会プロトタイプをもとに、さまざまな研修会の実施計画をたてて実施する。2)研修会の研修効果を現場に影響を与えるために、研修会

内容とより深く知るためのリンクを含めたガイドブックを発行する。3) 研修会内容やガイドブックの内容を深めるためにウェブページの充実をはかる。これらの課題を達成することが今年度の目標である。

## 4-2. 定着研修会 WG

### 1) 活動概要

定着研修会 WG では、研修会を通して、アダプテッド体育・スポーツの理解を促進し、インクルーシブな体育授業の実践ができる教員を育成することを目指している。そして、全国的に学校現場にアダプテッド体育・スポーツの視点を浸透させていくために、指導力向上の研修会や講習会の講師となるリーダー的人材の育成及び確保に向けて、その手法を検討している。昨年度までは、研修会の内容や具体的な教材について検討が重ねられ、教員免許更新講習会での実施を念頭にした「定着研修会コアカリキュラム」(図 1) が作成された。

今年度は、「定着研修会コアカリキュラム」をもとに、多様な研修会の時間に応じた効果的な研修内容の検証を行った。具体的には、研修会 A (6 時間)、研修会 B (12 時間)、研修会 C (3 時間)、研修会 D (1.5 時間) を設定し、各時間に応じた研修会の内容について検証を行った。また、本プロジェクトで使用しているアダプテッド・センシティブ尺度 (仮称 AS 尺度) による昨年までの結果から、「アダプテッドの主体性」の項目について、特別支援学校の教員には効果が確認されている一方で小学校の教員については検討の余地が残されていた。そこで今年度は、各研修会において小学校の教員の意識の変化に着目し、研修会の設定や内容について検討した。

(1) アダプテッドの理論的位置づけ  
(2) 障害児体育の実態の理解 (児童生徒観)  
(3) アダプテッドに特化した演習  
・ スポーツの魅力を阻害するものを取り除くためのアダプテッドの工夫への気付き  
・ アクション・リサーチを導入  
(4) インクルーシブに特化した演習  
・ 活動をするうえでの「違い」を知る方法を探る  
・ 「違い」を前提とした活動内容を考える

をコアカリキュラムとし、時間によって、種目や障害種を増減するようにする。また参加者のこれまでの実践経験を共有するセッションを組み込むのもよい。

図 4-2-1 : 定着研修会コアカリキュラム内容

### ① 研修会の方針

研修会 A (6 時間)、研修会 B (12 時間)、研修会 C (3 時間)、研修会 D (1.5 時間)を設定し、異なる研修の時間でも同様の効果を得ることができるかを検証する。また各研修会における内容の妥当性について検討する。

### ② 研修内容

基本として昨年度設定した「定着研修会コアカリキュラム」に沿って講義、演習を行うが、担当する講師の判断で内容を変更してもよい。

### ③ 研修方法

講義および演習による研修を行う。新型コロナウイルス感染症によりオンラインとなる場合は、昨年度の研修内容を踏まえて内容を工夫して実施する。

### ④ 対象となる研修会

研修会 A (6 時間)、研修会 B (12 時間)、研修会 C (3 時間) は大学等が主催する任意の研修会とする。また研修会 D は小学校の教員を主な対象とするために、小学校の校内研修を対象とする。

### ⑤ 研修会講師

研修会 A (6 時間)、研修会 B (12 時間)、研修会 C (3 時間) は主催する大学等が依頼した講師が担当する。研修会 D は定着研修会 WG より村上祐介氏が担当する。

### ⑥ 研修会の評価

研修の前後に 10 分程度時間をとり、アンケート調査及びアダプテッド・センシティブ尺度 (仮称 AS 尺度) によって評価を行う。

## 2) 活動目標

小・中・高等学校及び特別支援学校に在籍する障害のある児童生徒の体育授業の充実に資するため、障害のある児童生徒のための体育指導において、指導者となるべき人材確保を促進するための手法に関する調査研究を目的として定着研修会を企画、実施し、評価を行う。

## 3) WG メンバー

今年度の定着研修会 WG の目的を達成するために以下のメンバーで組織した。

松原豊 筑波大学体育系 教授  
 小沼博義 茨城県立つくば特別支援学校 教頭  
 曾根裕二 大阪体育大学 准教授  
 安藤佳代子 日本福祉大学 准教授  
 萩原大河 兵庫県姫路市立水上小学校 教諭  
 村上祐介 順天堂大学 助教（座長）  
 澤江幸則 筑波大学体育系 准教授（オブザーバー）

#### 4) 活動内容

今年度の事業開始に伴い、実行委員会および定着研修会 WG から関連する研修会の情報収集を行い、以下の研修会を分析対象とすることができた。以下では、各研修会について順次説明していく。

- 研修会 A（6 時間）：A 大学の免許更新講習会（2021 年 8 月）
- 研修会 B（12 時間）：B 大学の公開講座（2021 年 8 月）
- 研修会 C（3 時間）：C 県の教育研修センターの初任研（2021 年 7 月）
- 研修会 D（1.5 時間）：関東地区 X 小学校の校内研修（2022 年 1 月）  
 関東地区 Y 小学校の校内研修（2022 年 2 月）

##### ① 研修会 A（6 時間）

対象：A 大学の免許更新講習会

日時：2021 年 8 月

場所：A 大学

対象：14 名（内訳）中学校 2 名、小学校 7 名、特別支援学校 1 名、保育士・幼稚園 4 名

##### ■ 定着研修会としての構造

表 4-2-1：研修会 A のカリキュラム構造

時間	研修会としての行程	定着研修会としてのカリキュラム
120 分	インクルーシブ体育の意義と理念	障害児の体育指導の意義と理念
120 分	知的障害・発達障害の体育(講義・演習)	発達障害のある子どもの体育とインクルージョン
120 分	パラリンピック教育(講義・演習)	パラリンピック教育と障害児指導

■ 定着研修会の評価

アダプテッド・センシティブ尺度（仮称 AS 尺度）によるアンケート調査を実施し、事前事後の数値の差について対応のある  $t$  検定を用いて分析した。結果を図 2 に示した（ $n=14$ ）。「アダプテッド理解度」（事前  $1.36 \pm 0.40$ 、事後  $3.85 \pm 0.29$ 、 $t(13) = 12.30$ ）と「インクルーシブの理解度」（事前： $2.85 \pm 0.29$ 、事後： $3.92 \pm 0.07$ 、 $t(13) = 6.51$ ）、「障害のポジティブイメージ」（事前： $2.71 \pm 1.49$ 、事後： $3.86 \pm 1.46$ 、 $t(13) = 2.83$ ）、「アダプテッドの主体性」（事前： $2.71 \pm 1.49$ 、事後： $3.86 \pm 1.46$ 、 $t(13) = 3.31$ ）については事前と事後で有意な差が認められ、事後の方が高い数値であった（すべて  $p < .01$ ）。一方、「障害者スポーツのポジティブイメージ」（事前： $4.57 \pm 2.73$ 、事後： $5.00 \pm 0.00$ 、 $t(13) = 0.97$ ）と「アダプテッド体育への実践力」（事前： $5.79 \pm 0.18$ 、事後： $5.93 \pm 0.07$ 、 $t(13) = 1.00$ ）については有意な差が認められなかった。

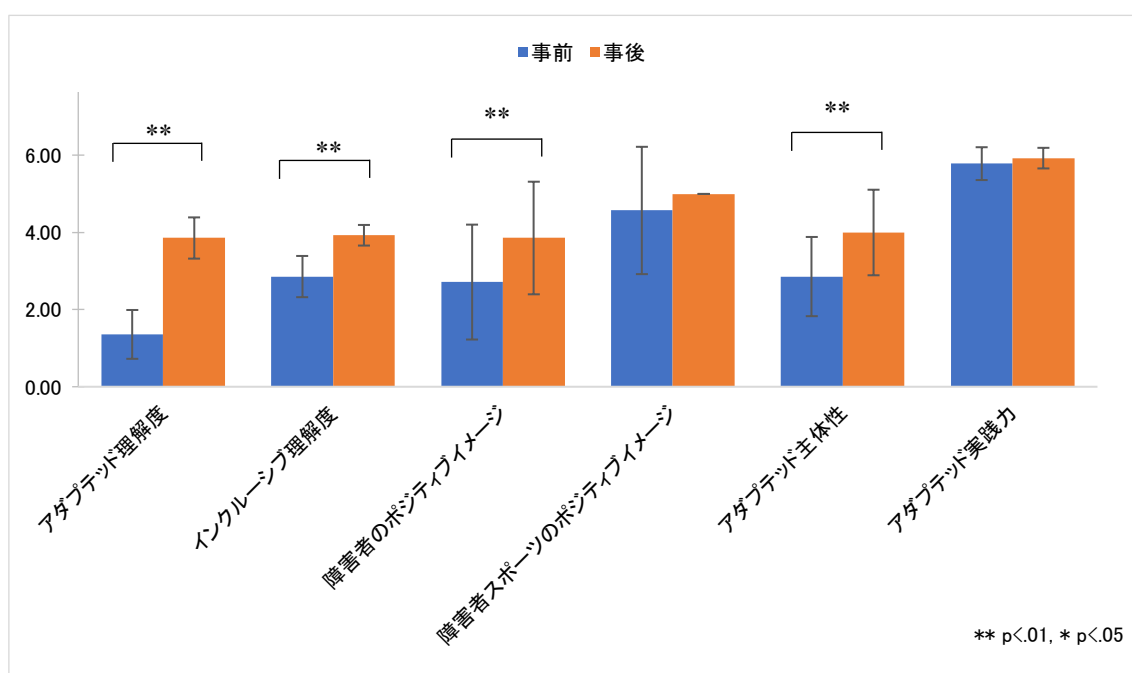


図 4-2-2：研修会 A（6 時間）における事前事後の AS 尺度の変化

■ 定着研修会の様子など（講師担当者より）

- ・ 参加者から、「これまで自分がやっていたことは障害のない子と同じことをどうやらせるかということに終始していたが、それは違うことが分かった」や「これまでどう対応すればいいか手探りだったが、今回、基本理念や実際の教材について学べてよかった」などの感想があった



- ・ 本プロジェクトのやっていることの必要性を感じさせてくれるものが多かった。

■ 考察および効果の検証

- ・ 小学校や中学校、そして保育士、幼稚園といったこれまで検証できなかった対象が含まれる研修会であった。
- ・ 全体として、昨年度までの研修会と同様に望ましい変化が確認できた。
- ・ 「障害者スポーツのポジティブイメージ」や「アダプテッド体育の実践力」は、受講前から高かった。普段からアダプテッドの意識を高く持っている（言葉は知らなくても）参加者が多かったことが伺える。

② 研修会 B (12 時間)

対象：B 大学の公開講座

日時：2021 年 8 月

場所：B 大学

対象：6 名（内訳）高等学校 1 名、中学校 1 名、小学校 1 名、特別支援学校 3 名

■ 定着研修会としての構造

表 4-2-2：研修会 B のカリキュラム構造

時間	研修会としての行程	定着研修会としてのカリキュラム
(1 日目) 9:00-10:00	アダプテッドとは？ 障害児の体育指導の意義と理念	障害児の体育指導の意義と理念
10:00-11:00	肢体不自由のある子どもの体育と インクルージョン	肢体不自由のある子どもの体育と インクルージョン
11:00-12:00	発達障害のある子どもの体育と インクルージョン	発達障害のある子どもの体育と インクルージョン
13:00-16:00	肢体不自由のある子ども、発達障害の ある子どもの体育とインクルージョン	アダプテッド演習
(2 日目) 9:00-12:00	障害のある子どもの体育とインク ルージョン	インクルーシブ演習
13:00-16:00	特別支援教育の体育(重度・重複 障害、聴覚障害)	

■ 定着研修会の評価

アダプテッド・センシティブ尺度（仮称 AS 尺度）によるアンケート調査を実施し、結果を図 3 に示した（n=6）。なお、分析するための十分なデータを得られなかったため、統計的な検定は行っていない。「アダプテッド理解度」（事前：2.33±0.67、事後：4.00±0.00）と「インクルーシブの理解度」（事前：3.67±0.27、事後：4.00±0.00）、「障害のポジティブイメージ」（事前：3.33±2.67、事後：4.33±2.27）、「アダプテッドの主体性」（事前：3.67±2.27、事後：4.33±2.27）、「アダプテッド体育への実践力」（事前：5.67±0.27、事後：6.00±0.00）については事前と事後で変化が確認でき、事後の方が高まることが分かった。

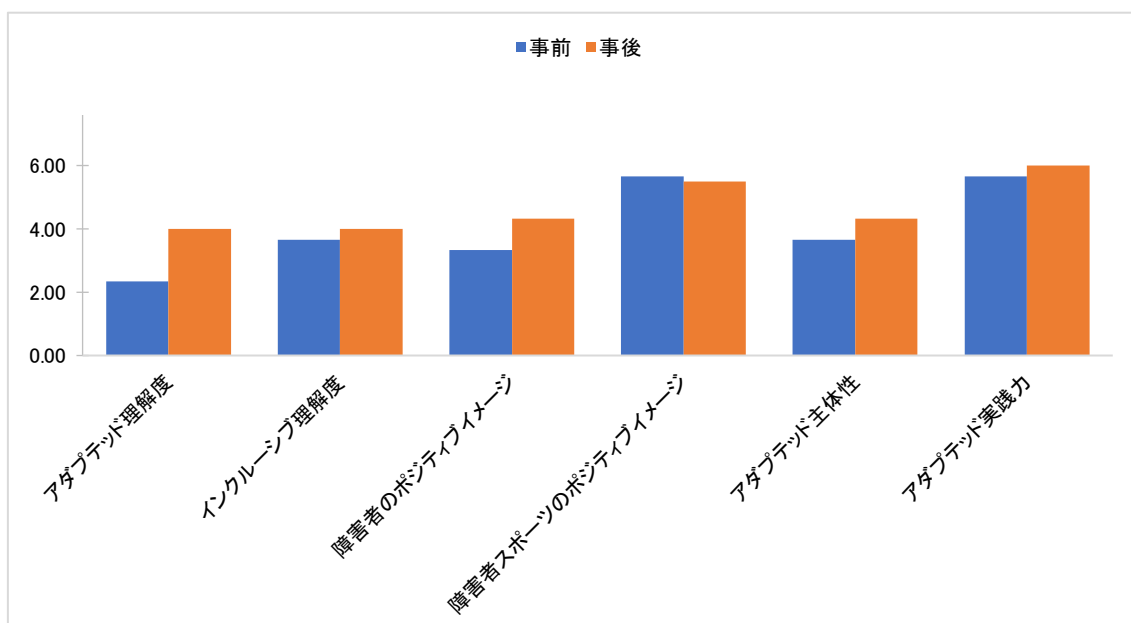


図 4-2-3：研修会 B における事前事後の AS 尺度の変化

■ 定着研修会の様子など（講師担当者より）

- ・ 高校で保健体育の教員をしている先生から、「子どもの多様性を感じるが多くなり、その分、今までの指導でうまく行かないことを実感するようになった」などの意見があった。高等学校においてもアダプテッドの視点が必要になっている。

■ 考察および効果の検証

- ・ 新型コロナウイルス感染症の影響により、十分な調査対象を得ることはできなかったが、高等学校での必要性に関する意見など貴重な知見を得ることができた。
- ・ 全体としては、昨年度までの研修会や研修会 A と同様に望ましい変化が確認できた。

- ・ 「障害者スポーツのポジティブイメージ」や「アダプテッド体育の実践力」は研修会 A と同様に受講前から高かった。12 時間という長時間の研修会であったため、より普段から意識が高い先生、また普段から対象に合わせて様々な工夫をしている先生が、今回のような長時間の研修を受けに来ていると考えられる。

### ③ 研修会 C (3 時間)

対象：C 県の教育研修センターの初任研

日時：2021 年 7 月

場所：C 県教育研修センター

対象：県内特別支援学校所属の初任者 77 名

#### ■ 定着研修会としての構造

表 4-2-3：研修会 C のカリキュラム構造

時間	初任者研修会としての行程	定着研修会としてのカリキュラム
13:00	はじめに	事前アンケート記入
13:10	講義：インクルーシブ体育の意義と理念	障害児の体育指導の意義と理念 障害のある子どもの体育とインクルージョン
14:00	<アリーナへの移動・休憩>	
14:15	演習：アダプテッドおよびインクルーシブ体育の実践	アダプテッド演習 インクルーシブ演習
15:30	休憩	事後アンケート記入
15:40	ふりかえり	
15:50	終了	

#### ■ 定着研修会の評価

アダプテッド・センシティブ尺度（仮称 AS 尺度）によるアンケート調査を実施し、事前事後の数値の差について対応のある  $t$  検定を用いて分析した。結果を図 4 に示した ( $n=73$ )。「アダプテッド理解度」(事前  $1.64 \pm 0.79$ 、事後  $3.81 \pm 0.52$ 、 $t(72) = 19.61$ ) と「インクルーシブの理解度」(事前： $3.26 \pm 0.53$ 、事後： $3.88 \pm 0.33$ 、 $t(72) = 9.69$ )、 「障害のポジティブイメージ」(事前： $2.55 \pm 1.86$ 、事後： $4.11 \pm 1.79$ 、 $t(72) = 5.65$ )、 「障害者スポーツのポジティブイメージ」(事前： $4.77 \pm 1.43$ 、事後： $5.29 \pm 0.46$ 、 $t(72)$ )

= 3.19)、「アダプテッドの主体性」(事前：3.12±1.63、事後：4.88±1.33、 $t(72) = 8.35$ )については事前と事後で有意な差が認められ、事後の方が高い数値であった(すべて  $p < .01$ )。一方、「アダプテッド体育への実践力」(事前：5.81±0.66、事後：5.96±0.20、 $t(72) = 1.95$ )については有意な差が認められなかった。

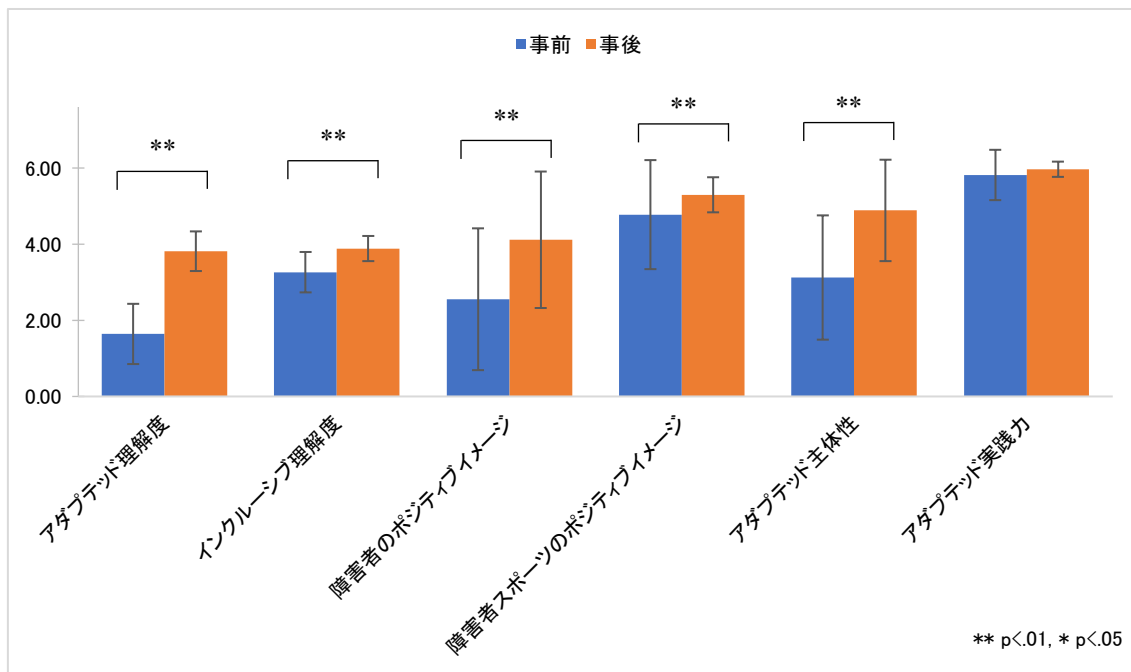


図 4-2-4：研修会 C (3 時間) における事前事後の AS 尺度の変化

■ 定着研修会の様子など (講師担当者より)

- ・ インクルージョン演習では、演技者 (支援が必要な子ども役) が感じたことをダイレクトに発表してくれたことが効果的であった。
- ・ 主催担当者からは、日頃、障害児と関わりがある分、かなり積極的に話し合いができたのではないかという感想があった。
- ・ はじめにゲームを入れるなどチームビルディング的な要素を入れる必要があるかもしれない。

■ 考察および効果の検証

- ・ 全体としては、昨年度までの研修会や研修会 A、研修会 B と同様に望ましい変化が確認できた。
- ・ 「アダプテッドの実践力」は事前事後ともにから高い状況であった。特別支援学校教

員という理由では説明できないため、初任者研修という点も考慮して引き続き検討が必要である。

#### ④ 研修会 D (1.5 時間)

##### ④-1 関東地区 X 小学校の校内研修

対象：関東地区 X 小学校

日時：2022 年 1 月

場所：X 小学校

対象：X 小学校教員 16 名

##### ■ 定着研修会としての構造

表 4-2-4：研修会 D (X 小学校) のカリキュラム構造

時間	校内研修会としての行程	定着研修会としてのカリキュラム
14:20	はじめに アンケート説明	事前アンケート記入
14:30	講義：インクルーシブ体育の意義と理念	障害児の体育指導の意義と理念 インクルーシブ教育とは アダプテッドとは
14:40	インクルーシブな体育実践 【演習①】「障害のある子どもがやってくる」 【演習②】「一緒にやってみる」 【演習③】「試行錯誤してみる」	インクルーシブ演習
15:25	まとめ	事後アンケート記入
15:35	終了	
	個別の質疑応答など	

##### ■ 定着研修会の評価

アダプテッド・センシティブ尺度（仮称 AS 尺度）によるアンケート調査を実施し、事前事後の数値の差について対応のある  $t$  検定を用いて分析した。結果を図 5 に示した ( $n=14$ )。「アダプテッド理解度」(事前： $1.31 \pm 0.40$ 、事後： $3.61 \pm 0.76$ 、 $t(13) = 8.78$ ) と「インクルーシブの理解度」(事前： $3.38 \pm 0.42$ 、事後： $3.84 \pm 0.14$ 、 $t(13) = 2.52$ )、 「障害者スポーツのポジティブイメージ」(事前： $3.54 \pm 3.60$ 、事後： $4.85 \pm 3.47$ 、 $t(13) = 2.62$ )、 「アダプテッドの主体性」(事前： $3.85 \pm 2.31$ 、事後： $4.77 \pm 2.36$ 、 $t(13) = 2.52$ ) については事前と事後で有意な差が認められ、事後の方が高い数値であった（「ア

「アダプテッド理解度」は  $p < .01$ 、その他は  $p < .05$ 。一方、「障害のポジティブイメージ」(事前： $2.15 \pm 0.97$ 、事後： $3.07 \pm 1.08$ 、 $t(13) = 2.14$ )、「アダプテッド体育への実践力」(事前： $5.46 \pm 0.27$ 、事後： $5.69 \pm 0.23$ 、 $t(13) = 1.90$ )については有意な差が認められなかった。

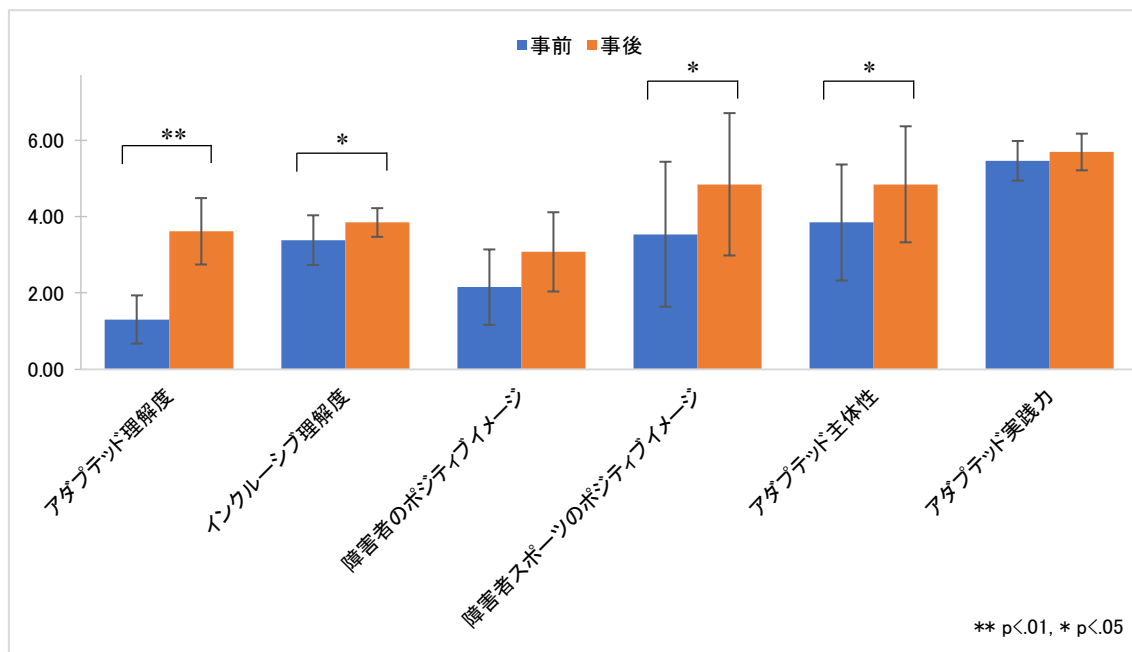


図 4-2-5：研修会 D (X 小学校) における事前事後の AS 尺度の変化

■ 定着研修会の様子など（講師担当者より）

- ・ インクルーシブ体育に関する実技演習という形で、実技メインの研修会であった。そのため、講義の部分でアダプテッドの考え方を丁寧に説明することが難しかった。
- ・ 実技演習では、先生方の積極性に助けられるとともに、あれこれ考えながらやってみる、という試行錯誤の様子が見られた。

■ 考察および効果の検証

- ・ ほとんどの先生が「アダプテッド」という用語を聞いたことがない状況で、研修を通して「アダプテッド」を知ってもらう機会となった
- ・ 「アダプテッド体育への実践力」は事前事後ともに高かった。
- ・ 「障害へのポジティブイメージ」は有意な変化が確認できず、これまでの研修会 (A、B、C) と比較しても事前事後ともに低い状態であった。
- ・ 小学校の先生において、「障害へのポジティブイメージ」が低いことは 2019 年度、

2020年度の本事業においても確認されている。しかし、今回の研修会では、75分という時間の中で「アダプテッド」の丁寧な説明が行き届かず、「アダプテッドによって子ども最大限の力を引き出す」というところが伝えきれなかった。

- 短い時間の中で「アダプテッド」による子どもの変化を強調する必要がある。
- ・ また、支援が必要な子どもへのアダプテッドを考え、かつ他の子どもも巻き込んだインクルーシブを実現するアプローチは、逆説的に、支援が必要な子どもの「大変さ」や「不便さ」が強調されてしまう可能性もある。一方で、校長先生からは、「今回の研修をきっかけに、今後インクルーシブな体育をやってみよう」と考え、実践する教員が必ず出てくる、というコメントもあった。
- 小学校の先生に対する校内研修では、「障害へのポジティブイメージ」の変化を求めるよりも、まずは「アダプテッドの実践」や「インクルーシブな体育をやってみよう」と思ってもらえるような研修を行うことが求められる。

#### ④-2 関東地区 Y 小学校の校内研修

対象：関東地区 Y 小学校

日時：2022年2月

場所：Y 小学校

対象：Y 小学校教員 26 名

##### ■ 定着研修会としての構造

表 4-2-5：研修会 D (Y 小学校) のカリキュラム構造

時間	校内研修会としての行程	定着研修会としてのカリキュラム
14:20	はじめに アンケート説明	事前アンケート記入
14:30	講義：インクルーシブ体育の意義と理念	障害児の体育指導の意義と理念 インクルーシブ教育とは アダプテッドとは (ガイドブックを使用して説明)
14:40	インクルーシブな体育実践 【演習①】「障害のある子どもがやってくる」 【演習②】「一緒にやってみる」 【演習③】「試行錯誤してみる」	インクルーシブ演習
15:25	まとめ	事後アンケート記入 ガイドブックアンケート記入
15:30	ホームページの紹介と説明、終了	ホームページ案内チラシの配布

■ 定着研修会の評価

アダプテッド・センシティブ尺度（仮称 AS 尺度）によるアンケート調査を実施し、事前事後の数値の差について対応のある  $t$  検定を用いて分析した。結果を図 6 に示した ( $n=24$ )。「アダプテッド理解度」(事前:  $1.44 \pm 0.67$ 、事後:  $3.64 \pm 0.32$ 、 $t(24) = 13.47$ ) と「インクルーシブの理解度」(事前:  $3.16 \pm 0.47$ 、事後:  $3.60 \pm 0.25$ 、 $t(24) = 3.38$ )、「障害のポジティブイメージ」(事前:  $2.56 \pm 2.84$ 、事後:  $3.28 \pm 2.29$ 、 $t(24) = 2.82$ )、「アダプテッドの主体性」(事前:  $3.28 \pm 2.29$ 、事後:  $4.40 \pm 1.67$ 、 $t(24) = 3.93$ ) については事前と事後で有意な差が認められ、事後の方が高い数値であった(すべて  $p < .01$ )。一方、「障害者スポーツのポジティブイメージ」(事前:  $3.96 \pm 3.46$ 、事後:  $4.36 \pm 2.49$ 、 $t(24) = 2.62$ ) と「アダプテッド体育への実践力」(事前:  $5.60 \pm 0.33$ 、事後:  $5.68 \pm 0.31$ 、 $t(24) = 0.70$ ) については有意な差が認められなかった。

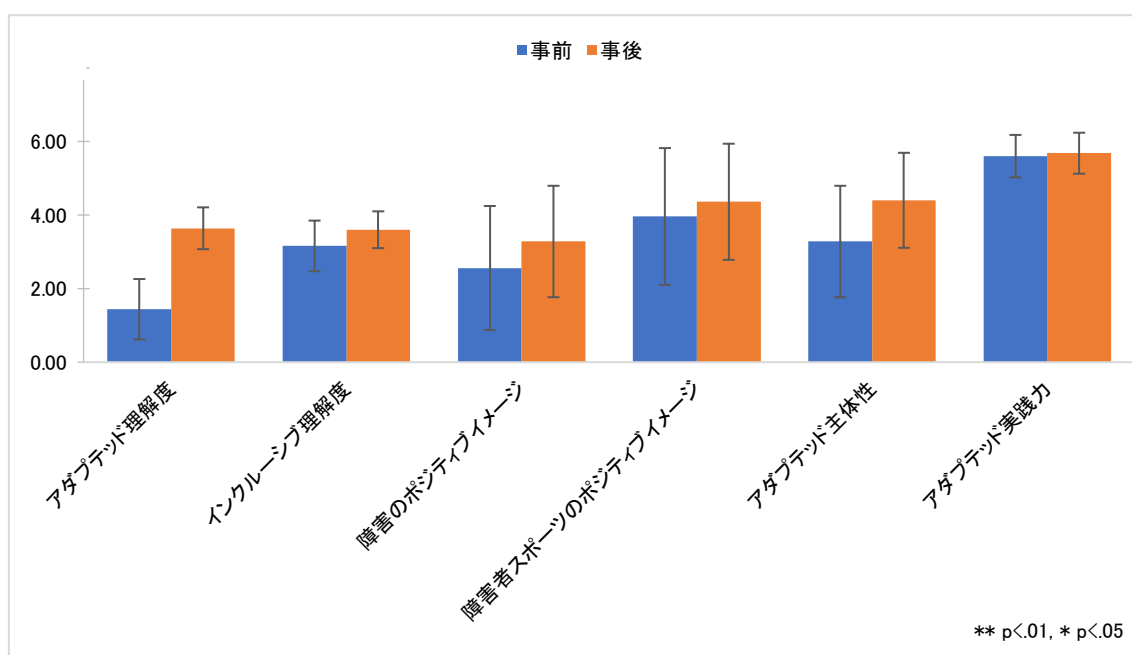


図 4-2-6 : 研修会 D (Y 小学校) における事前事後の AS 尺度の変化

■ 定着研修会の様子など (講師担当者より)

- ・ インクルーシブ体育に関する実技演習という形で、実技メインの研修会であった。ガイドブックを活用し、短い時間の中でアダプテッドの考え方を説明できた。
- ・ 実技演習では、先生方の積極性に助けられるとともに、あれこれ考えながらやってみる、という試行錯誤の様子が見られた。



## ■ 考察および効果の検証

- ・ ほとんどの先生が「アダプテッド」という用語を聞いたことがない状況で、研修を通して「アダプテッド」を知ってもらう機会となった。「アダプテッド理解度」「インクルーシブ理解度」「アダプテッド体育の主体性」は有意な変化を確認できた。
- ・ 「アダプテッド体育への実践力」は事前事後ともに高かった。
- ・ 「障害者スポーツのポジティブイメージ」は有意な変化が確認できなかった → 事前に高かった方が多かったことが要因。
- ・ X小学校（1月14日）と比較すると、「障害へのポジティブイメージ」が事前事後ともに高く、有意な変化が確認できた。
  - 「特別支援学校」の教員免許を保持している方が4名おり、事前事後ともに高い数値。
  - ガイドブックを通して、「アダプテッドによって子ども最大限の力を引き出す」というところが強調できた。
- ・ 「アダプテッドの実践」や「インクルーシブな体育をやってみよう」と思ってもらえるような研修という点で、特別支援学級の先生方が興味を持ってくれた。
- ・ 体育主任の先生のコメント（研修後の個別相談）

「アダプテッドという考え方や実践にはとても共感できて、私自身もそのような体育の授業を目指している。しかし、体育教員が集まる研究会などでは、『それが中学校での学びにどのようにつながるのか』といった意見に押され、やっぱり運動技能の上達や体力向上という話になっていく。年齢が上の先生は特にそういう傾向が強い。」

  - アダプテッドの実践が子どもの将来にどのようにつながるのか、今後より詳細な研究が必要。

## 5) まとめ

今年度は、多様な研修会の時間に応じた効果的な研修内容を検証するために、研修会 A（6時間）、研修会 B（12時間）、研修会 C（3時間）、研修会 D（1.5時間）を設定し、検討を行った。特に研修会 D（1.5時間）では、限られた時間の中でどのような内容がよいか、どのような事例を扱うかなど、定着研修会 WG でも様々な議論が行われた。以

下では、定着研修会 WG において中心的に議論された内容をまとめ、今年度の取り組み効果の検証を行う。

#### ① 時間に応じた目標の設定

- ・ 昨年度設定された「定着研修会コアカリキュラム」は、研修会 A（6 時間）、研修会 B（12 時間）、研修会 C（3 時間）においては比較的応用しやすかったが、研修会 D（1.5 時間）に応用するには時間的な難しさがあった。そこで今回は「演習」に焦点を当てる「研修会 D（1.5 時間）の基本構造」（巻末資料 A）を作成し、それに基づいて研修会 D が実施された。その結果、1.5 時間の中で実際に体を動かしながら話し合う時間を確保でき、アダプテッドの重要な部分を伝えることができた。
- ・ 一方で、研修会 A、B、C と比較すると研修会 D では伝えられることに限界がある。各種研修会には時間の制約が必ずあるので、与えられた時間に応じて目標を明確にし、その目標を達成するためにはどのような内容にすべきかを考えていく必要がある。その点、今回の研修会 D は「アダプテッドの具体的なアイデアを考え、引き出し、共有する」を主な目的とし、そのために「演習」を中心とした内容を設定したと捉えられる。

#### ② 小学校から中学校へのつながり

- ・ アダプテッドによるインクルーシブな体育授業が、中学校の体育授業にどのようなつながるのか。特に中学校では、スポーツ競技への志向が強まるため、各種スポーツの技能の向上などを意識することは自然な流れである。アダプテッドの重要性を伝えていく一つの考えとして、体育科教育における「教材づくり」（例えば、岩田靖の理論）に照らし合わせることで、先生達にとって身近になるのではないか。先生方が普段から行っている教材づくりの延長線上に、支援が必要な子どもを想定したアダプテッドがある。
- ・ 関連して、小学校あるいは中学校の学習指導要領では、「仲間の状況に合わせてルールや場を工夫する」や「体力や技能、性別や障害の有無等による、動きや課題及び挑戦などに違いがあることに気付き、その違いを可能性として捉え、積極的に互いを認めようとする意思をもつこと」といったことが示されている。このことを踏まえる

と、仲間に合わせてアダプテッドすること自体、中学校への学びとして学習指導要領に則ったものであることには変わらないので、そのことを強調してもよい。

### ③ 演習で扱う事例の検討

- ・ 今回の研修会 D では、担当した講師のアイデアにより、支援が必要な A ちゃんという設定で「左半身（右半身）麻痺の肢体不自由の子ども」を設定した。その結果、アンケートの数値から、障害のポジティブイメージに変化が見られないものもあった。この点については、扱う事例のさらなる検討が必要ではないか。例えば、上述の A ちゃんの実例は参加した先生方にとって身近な子どもの実態としてイメージしにくいかもしれない。むしろ、先生方が実際に関わっている子どもを想定した事例を扱う方がよいのではないか。教室場面なども含めて、先生方にとってイメージしやすい子どもを扱う事例も今後検討していく。

### ④ アダプテッドと子どもの学年や発達段階

- ・ 研修会 D に参加したある先生から、「小学校の高学年くらいだったらアダプテッドの実践をしやすいけれど、中学年や低学年では難しいかもしれない。」といった話があった。一方で、本 WG メンバーからは「低学年のほうが実践しやすい」という意見もある。子どもの発達段階などによっては、ルールの変更に対して「あの子だけずるい」ということもよくある。そういった気持ちは子どもにとって当たり前のことであり、むしろその気持ちを表すことは子どもの発達として、また教育的にも意義があることかもしれない。学年や発達段階に応じてアダプテッドをどのように展開していくかも検討課題である。

## 6) 今後の課題

- ・ 今後は、全国的に研修会を展開していく予定だが、講師を担当できる人を確保していく必要がある。その点、ある地域では、先進的な取り組みを行っている現場の教員が講師となって地域の先生方に伝えていくような事例もある。それらも参考にし、また本事業で作成しているガイドブックやホームページなども活用しながら、充実した研修会の範囲を広げていけるように講師の養成を検討していく必要がある。

- 研修会というと、**How to** を求める声もよく耳にするが、アダプテッドは「考え方」を丁寧に伝えていくことが必要である。定着研修会 **WG** の会議で何度も話題に上がったが、すでにインクルーシブな体育授業を実践している、あるいはこれからインクルーシブな体育授業に取り組もうとしている先生方の後押しができるような研修会が望ましい姿である。
- 全国ではインクルーシブに力を入れている地域もあるが、現実には難しいところが多い。また、そういった地域でも各教員がインクルーシブやアダプテッドについて丁寧に学んでいるわけではない。やはり、今回のような研修会が今後広がっていくことが求められる。

## 4-3. ガイドブック WG

### 1) 活動概要

ガイドブック WG では、障害のある児童が在籍する小学校の体育授業を実践する際の困難さを解決するための研修会用のガイドブックを作成した。また、ガイドブックに関するアンケート調査を実施することにより、ガイドブックの有効性について検証を行った。さらに、検証結果より今後のガイドブックの方向性について検討を行った。なお、ガイドブック WG では全7回の実行委員会を実施した。

#### ①研修会用ガイドブックの作成

現職教員が障害のある児童生徒を含む体育授業をする際の困難さを解決するために使用するガイドブックを作成した。内容は「理論編」と「実践編」の2部構成とし、「理論編」は2020年度に作成したガイドブックの「理論編」をベースとし、「実践編」は2020年度版を踏襲しつつWGメンバーを中心に新たに作成した。「実践編」の作成にあたり、「見開きで1頁のレイアウトにする」、「障害種ごと（視覚障害、聴覚障害、知的・発達障害、肢体不自由）に作成する」、「単元を球技（バレーボール）、球技（サッカー）とする」、「アダプテッドのポイントを『もの』『ルール』『人』の3つとする」、「ステップ1～3を示し、困り感から解決へと導く」、「『もの』『ルール』『人』以外のアダプテッドのポイントはTweet欄に示す」、「最後にHPのURL、QRコードを加える」、以上の点に留意した。また、ガイドブックはアダプテッドへの入り口の位置づけとし、シンプルな構成、デザインとした。

#### ②ガイドブックの有効性に関するアンケート調査

ガイドブックの有効性を明らかにすることを目的にアンケート調査を実施した。研修会を実施した東京都の小学校26名の現職教員を対象に、研修会の終了時に行った。結果としては、ガイドブックの方向性としては概ね良かったと考えられた。ガイドブックのシンプルな内容が一定の評価を受け、さらに内容を深めていきたいという回答が多く、アダプテッドへの入り口の役割をある程度担ったと思われた。また、ガイドブックが参考になった、あるいは他の先生に勧めたい、との意見が多く見られ、現場の先生が体育

授業の困り感を軽減させるために役立つと感じてもらえたと考えられた。その一方で「アダプテッド」という用語について嫌悪感を抱くような意見も見られた。現在の「アダプテッド」の広がりや今後の普及浸透について、プロジェクトとしては今後も取り組んでいきたい課題だと思われた。

### ③ガイドブックの今後の方向性についての検討

アンケート調査の結果を基にガイドブックの今後の方向性について検討を行った。本年度、研修会においてガイドブック「理論編」「実践編」共に使用したことにより、研修会の講師から運営のしやすさ、説明のしやすさが報告された。そのため次年度もガイドブックは「理論編」「実践編」の2つの柱で構成したいと考えた。さらに、ガイドブックが仲介役となり、研修会、ガイドブック、HPの横のつながりを大切にしながら、ガイドブックの作成を進めていくことが意見として出された。また、ガイドブックはアダプテッドの入り口として、シンプルに作成してHPへと誘うツールとしても機能させたいことが確認された。

来年度のガイドブックについては本年度と同様に報告書の付録としてガイドブックを作成し、HPに公開する方向で進めることを計画する。例年キックオフミーティングが6月以降のため、9月より始まる研修会用のガイドブックとしては本年度のガイドブックを印刷して使用しつつ、WGとしては、執筆者を選定して「バレーボール」、「サッカー」以外の単元に関するガイドブックの執筆を進めてコンテンツを増やしていきたいと考えている。将来的には積み上げたコンテンツが出版物となることも視野に入れ活動を進めることを希望している。

## 2) 活動目標

本グループの活動目標は、障害のある児童生徒が在籍するクラスの体育授業を担当している教員が、実際に体育授業をする際の困難さを解決するための研修会用ガイドブックを作成し、アンケート調査を実施することにより、ガイドブックの有効性について検証することであった。

## 3) WGメンバー

阿部 崇 (東京家政大学 准教授)

天野 和彦 (筑波技術大学 准教授)  
綿引 清勝 (いわき短期大学 講師)  
牧 舞美 (兵庫県立阪神昆陽特別支援学校 教諭)  
澤江 幸則 (筑波大学体育系 准教授) オブザーバー

#### 4) 活動内容

##### ①研修会用ガイドブックの作成

##### ①-1 ガイドブックの趣旨

ガイドブックは、教育現場において障害のある児童が在籍するクラスの体育授業を担当している現職教員が、実際に体育授業をする際の困難さを解決するためのツールとして作成した。また、広報WGと連携を取り、内容を擦り合わせて、HPの入り口となるようなシンプルでわかりやすいガイドブックを目指した。

##### ①-2 ガイドブックの構成について

ガイドブックは、「理論編」(図4-3-1)と「実践編」(図4-3-2)の2部構成とした。「理論編」は2020年度に作成したガイドブックの「理論編」をベースとし、「実践編」は2020年度版を踏襲しつつWGメンバーを中心に新たに作成した。

実践編は「視覚障害」、「聴覚障害」、「知的障害・発達障害」、「肢体不自由」の4つの障害カテゴリーに分け、さらに単元として球技の「サッカー」、「バレーボール」に焦点を当ててまとめた(表4-3-1)。単元については、定着研修会WGと広報WGで調整を行い、決定した。実践編の内容については各障害カテゴリーの単元ごとに「ステップ1 こんな子いませんか?」、「ステップ2 バリアはなに?」、「ステップ3 アダプテッドのポイント」、「Tweet」の構成とした。「ステップ1 こんな子いませんか?」では活動に参加することが困難な例を挙げ、「ステップ2 バリアはなに?」では「もの」「ルール」「人」のそれぞれのバリアについて説明し、それらのバリアへの対応として「ステップ3 アダプテッドのポイント」で「もの」「ルール」「人」の視点で解説した。さらに「Tweet」では、「もの」「ルール」「人」では整理し難い内容やその他に大切だと思われる視点を記述することにした。最後にアダプテッドのポイントとなるHPのURL、QRコードを加えた。

作成にあたり、「見開きで1頁のレイアウトにする」、「読みやすくシンプルな内容」、

「より深めたくなり、HP への入り口となるような内容」を意識した。そのため、HP を構築した広報 WG 委員に本 WG 委員が作成した実践編の内容を確認、必要があるところの修正を依頼し、その作業結果をもとにガイドブックを編集した。

## アダプテッドの必要性

### 障害児体育の現状と課題からその必要性について

1) スポーツをすることは人権

- 障害のある人がスポーツをすることは当たり前である（障害者権利条約第 30 条）。
- スポーツとは、競技種目だけでなく、遊戯としての身体活動、ビジネスで使われるスポーツなど様々である。
- 身体を動かすという人間の本源的な欲求に応え、精神的充足をもたらすものである（スポーツ庁、第二期スポーツ基本計画）。
- スポーツは、競技や勝利することだけの価値だけではない。友情、尊敬に加え、勇気や決断、鼓舞、平等など、多様な価値がある。

2) 障害のある人のためのインクルーシブ教育

障害のある者が教育制度一般から排除されないことが望まれ、さまざまな学びの場で、障害のある児童生徒が教育を受けている。

特別支援学級の在籍者数は毎年平均 7.6%増加し、小学校では特別支援教育制度の影響を受け、さまざまな体育の授業形態が存在している。中学校では特別支援学級を中心、高等学校では通常学級のみで展開される傾向がある。

3) 障害のある子どもたちの声

- 体育は「見学するもの」？
- ぼくが入ると嫌な顔をされるやつも「下手と言われる」
- スポーツ価値の偏重（能力・勝利至上主義）だけではない（多様な価値）
- だって、そこには健常者がいるから 理想よ 家族の気持ちも考えて
- 相互理解の不足（一緒にいることが前提である状態）

4) インクルーシブ体育を実践するためには？

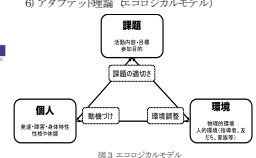
多様な価値の理解と共有（多様性 Diversity）と一緒に授業を行う状態（包摂 Inclusion）をつないでいかなければならぬ。その両者をつなぐ観点や技術のひとつがアダプテッドである。

5) アダプテッドとは

国際的には、障害のある子どもの体育の充実を図るために、その特性に応じた工夫などの方法論や理論について、学際的に議論する領域として、**Adapted Physical Activity and Education** があり、国際学会（FAPA）はもちろんだこと、欧米大学のいくつかにおいて、それを標榜する学科や研究室がある。アメリカにはそれに関する資格もある。日本では筑波大学や日本福祉大学に研究室がある。

障害者スポーツがアダプテッドスポーツというわけではなく、関連する用語を整理すると図 2 のようになる（諸説あり）。障害者を含め、身体活動をするうえで何らかのニーズのある人すべてが対象である。そして重要なのは、「その人に合わせる」ことを真骨頂とした方法論である。

6) アダプテッド理論（ネコジカルモデル）



単に「その人に合わせる」ことをして、結果的に身体活動の楽しさを享受できなくなることもある。そのためにも、個人的特性だけでなく、課題や環境に合わせて、課題を適正化し、環境調整し、動機づけしていくことが望まれる（図 3）。

7) アダプテッドと合理的配慮

合理的配慮とは、障害のある人が障害のない人と平等に人権を享受し行使できるように、一人ひとりの特徴や場面に応じて発生する**喪失された部分**を補い、**困っている部分**を取り除くための個別の調整や変更等のことをさす。アダプテッドは、合理的配慮の一部であるが、単に喪失された部分のみをみるのではなく、**喪失された部分を捉える**ことで、本人や活動そのものの**可能性を引き出す**ことに意味をもたせている。

図 2 アダプテッドの類型

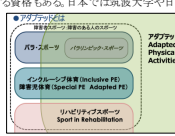


図 3 エコジカルモデル

図 4 もっと学びたい人へ

参考ホームページ  
アダプテッド・スポーツの由来（JASAPE 学会 HP 内）  
<http://www.adapted-sp.net/yan-jiu-qing-bao/adapteddo-supotsuno-yuu-lai>




図 4-3-1 理論編のレイアウト

## 知的障害・発達障害

### ステップ3 アダプテッドのポイント

球技 バレーボール

ステップ1 こんな子いませんか？

- ・ ボールを怖がってしまう
- ・ ボールを打つことが難しい
- ・ ミスして友達に責められるのが嫌だからやりたくない

ステップ2 バリアはなに？

「もの」のバリア

- ・ ボールの大きさや硬さが合わない

「ルール」のバリア

- ・ 自分の守備範囲がわからない

「人」のバリア

- ・ 自分のミスでチームの足を引っ張ってしまうのが心配

☆ 「もの」のアダプテッド

- ・ ボールをレクリエーションバレーボール、風船、ビーチボールなどに変えてみよう。

☆ 「ルール」のアダプテッド

- ・ 個人のプレーするエリアを固定したり、座ってプレーしたりするなど、動きやすさを調整してみよう。
- ・ ワンバウンドでもよいルールにして、少し余裕をもってボールへの対応ができるようにしてみよう。

☆ 「人」のアダプテッド

- ・ サーブは 2 本まで打てるようにしたり、自分の好きなところから打てるようにしたりするなど、本人の技能に応じてできることを工夫してみよう。

Tweet

その競技本来の面白さは残しつつ、思い切ったルールや活動方法を変更すると、新しい発見がある。

□ もっと学びたい人へ □

参考ホームページ  
☆ 明日の体育で何をしよう？（アダプテッド定着プロジェクトHP内）  
<https://adaptedproject.jimdofree.com/明日の体育で何をしよう/>  
（最終的には、上記種目にあつた内容のHPに飛びますが、現在は総集編の内容のHPです）




図 4-3-2 実践編のレイアウト



表 4-3-1 実践編で扱った領域と単元について

領域	単元
視覚障害	サッカー / バレーボール
聴覚障害	サッカー / バレーボール
知的障害・発達障害	サッカー / バレーボール
肢体不自由	サッカー / バレーボール

## ②ガイドブックの有効性に関するアンケート調査の結果

### ②-1 アンケート調査の実施

(ア) 調査期日：2022年2月16日

(イ) 調査対象：本研修会を校内研修の位置づけで実施した東京都の小学校の現職教員26名（回収率100%）。

### ②-2 研修会におけるガイドブックの使用とアンケート調査

本研修会では講義「インクルーシブ体育の意義と理念」においてガイドブックの「理論編」をテキストとして使用し、演習「インクルーシブな体育実践」においては「実践編」の「もの」「ルール」「人」の視点で展開された。研修会の最後のまとめの時間においてガイドブックに関するアンケートは実施された。

### ②-3 記載内容

「ガイドブックに記載されている内容は十分でしたか？」の問いに対して、「思う」が最も多く62%、次いで「とても思う」が27%、「どちらともいえない」が11%を占めた。

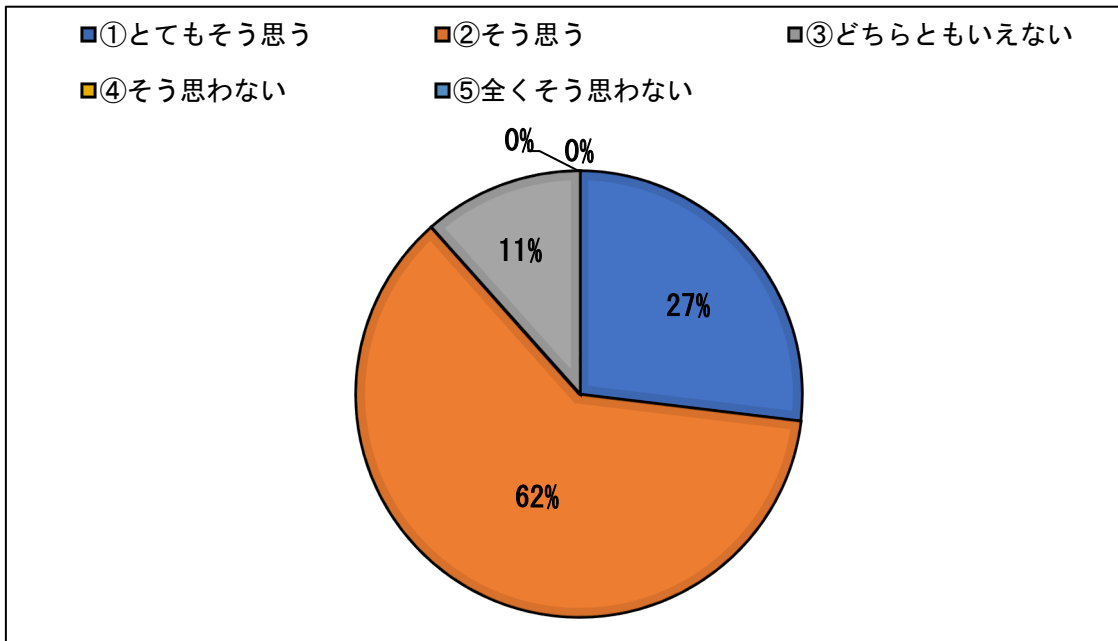


図 4-3-3 記載内容 (N=26)

#### ②-4 デザインの見やすさ

「ガイドブックのデザインは見やすかったですか？」の問いに対して、「そう思う」が最も多く 46%、次いで「とてもそう思う」が 42%、「どちらともいえない」が 8%を占めた。

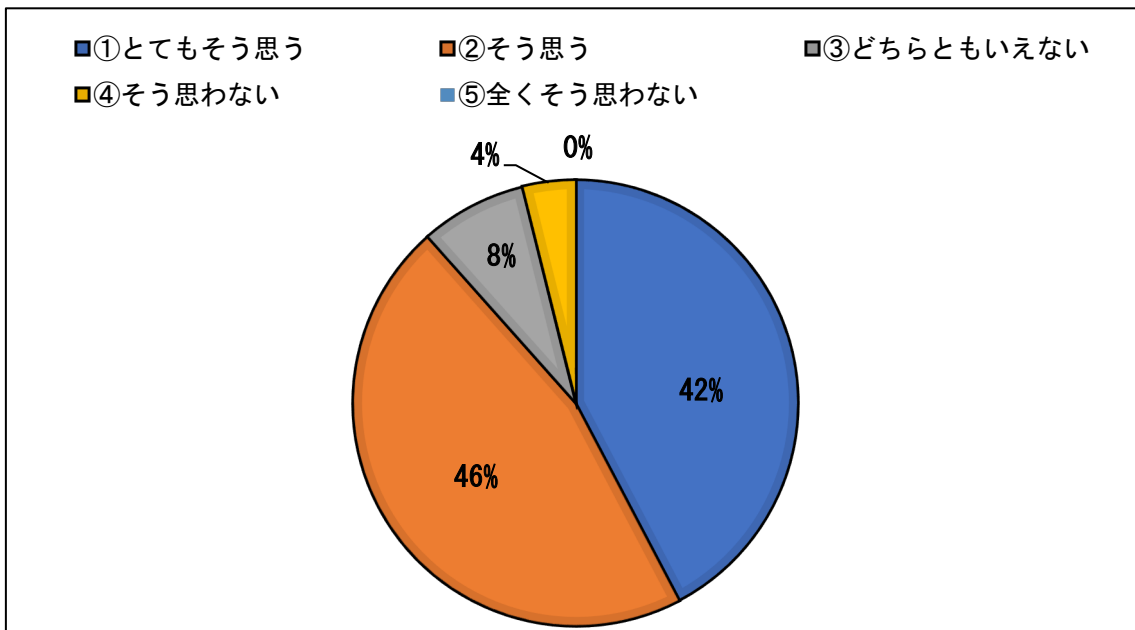


図 4-3-4 デザインの見やすさ (N=26)

## ②-5 ガイドブックの内容の深化

「ガイドブックの内容についてさらに深めたいと思いましたが?」の問いに対して、「そう思う」が最も多く 58%、次いで「とてもそう思う」が 38%、合わせて 96%を占めた。

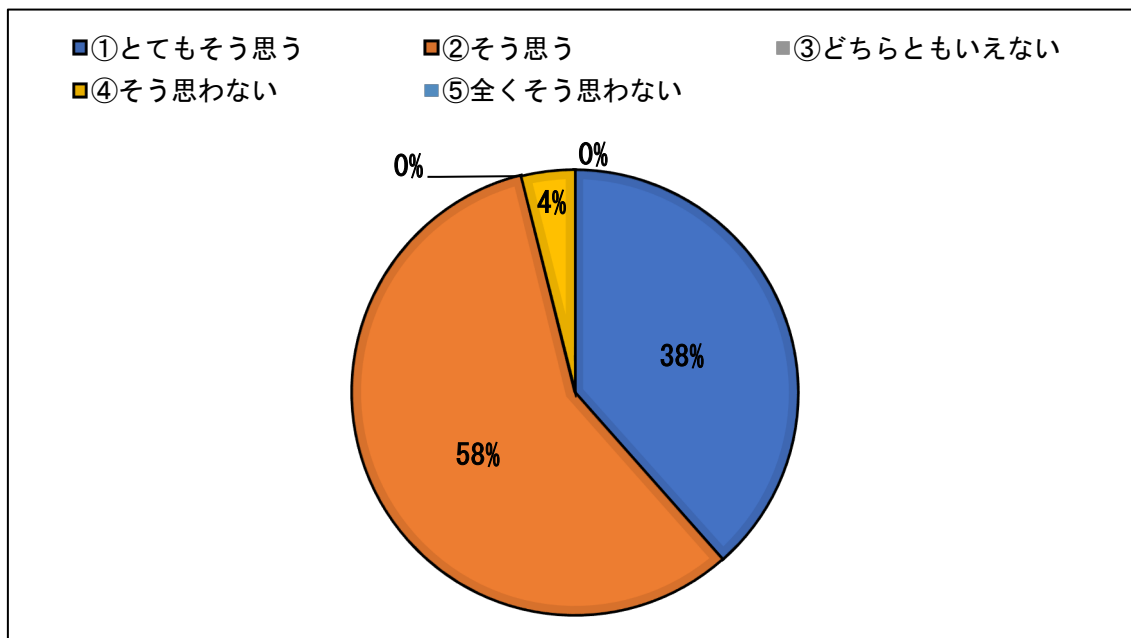


図 4-3-5 ガイドブックの内容の深化 (N=26)

## ②-6 ガイドブックの参考

「障害のある児童・生徒の体育授業で困ったときに、このようなガイドブックを参考にしてみようと思えますか?」の問いに対して、「とてもそう思う」と「そう思う」が最も多くそれぞれ 46%であり、合わせて 92%を占めた。

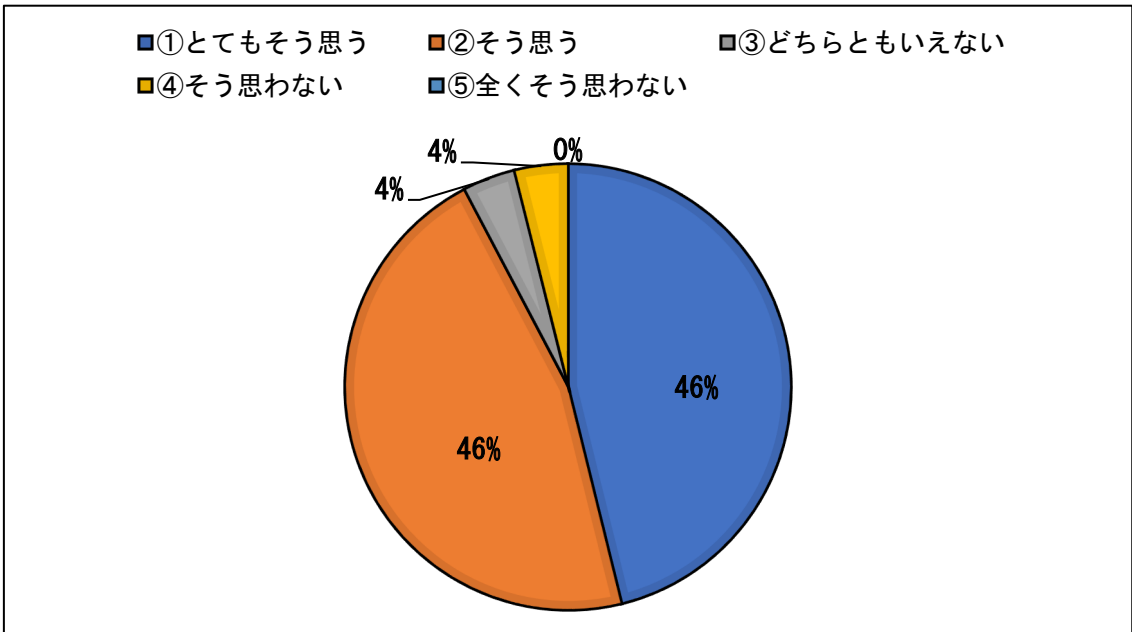


図 4-3-6 ガイドブックの参考 (N=26)

#### ②-7 ガイドブックの勧め

「障害のある児童・生徒の体育授業で困っている他の教員に、このようなガイドブックを勧めようと思いますか？」の問いに対して、「とてもそう思う」が最も多く 50%、「そう思う」が次いで 38%であった。

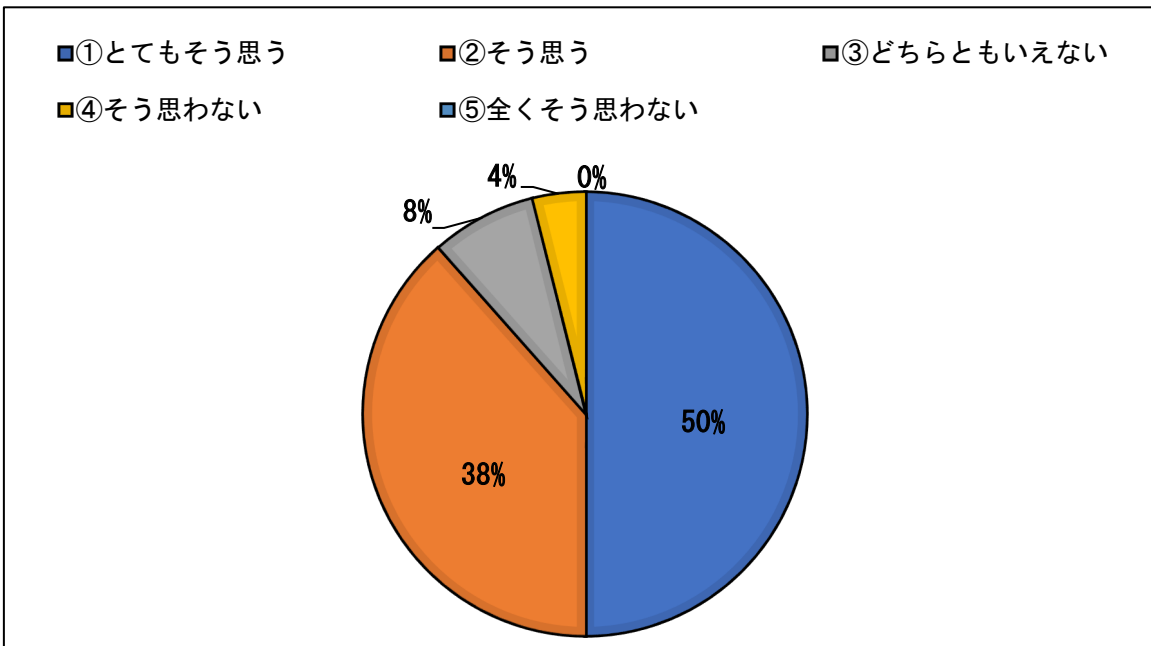


図 4-3-7 ガイドブックの勧め (N=26)

## ②-8 ガイドブックについての感想（自由記述：原文ママ）

- ・字が少なく読みやすかったです。具体的なサポートのアイデアが多く入っていたので、それらを上手に組み合わせていきたいです。
- ・具体例を増やした方が良い。「アダプテッド」という単語はやめた方が良い。難しい言葉が多いので、もっとやさしい言葉で説明してほしい。（難しいですね。）
- ・すてきなガイドブックをありがとうございます。
- ・まだインクルーシブで教育できていない。私のクラスではまわりの児童が育っていない現状なので、難しいと思います。大人だから教師だからできるのであって実践はどうだろう。
- ・内容については一度実践してみないと分からないと思い、どちらとも言えないとしました。ポイントの項目が「もの」「ルール」「人」に分かれていて分かりやすかったです。
- ・「サッカー」など、項目ごとへの工夫が分かりやすかった。
- ・イラストが少し少ないように思いました。
- ・アダプテッドをあまり知らなかったなので、今後参考にして取り入れていきたい。
- ・読み深めたいと思います。
- ・3つのバリアについて考えさせられました。発達段階に応じて、用具、ルール、場を設定したいです。
- ・活用しやすい内容になっていると思った。

## ③ガイドブックの今後の方向性についての検討

### ③-1 アンケートの結果から

アンケート結果の全体的な傾向については、ガイドブックの方向性として概ね良かったと考えられた。ガイドブックの「記載内容」については、シンプルな内容で、HPの入り口的な役割を意識して作成したことを考えると、「そう思う」が大半を占めたことはガイドブックの目的は達成したと考えられた。受講者がガイドブックについて少し物足りなさを感じ、HPへアクセスするきっかけになると思われた。また、「デザインの見やすさ」についてはある一定の支持が得られて、シンプルさが受け入れられたと捉えた。「ガイドブックの内容の深化」については、さらに深めていきたいという回答が多く、アダプテッドへの入り口になったと感じた。「ガイドブックの参考」、「ガイドブックの勧め」については現場の先生が体育授業の困り感を軽減させるために役立つと感じてい

たのではないかと考えられた。「ガイドブックについての感想（自由記述）」については、「アダプテッド」という用語について否定的な意見が一部見られた。現在の「アダプテッド」の広がりや今後の普及浸透について、プロジェクトとしては今後も検討していきたい課題の一つと考えた。その一方で、今回のアンケート調査は校内研修として実施された研修会が対象であり、研修に対しては受講した教員の意欲に差があったことも影響があったと考えられた。

### ③-2 今後の方向性について

研修会においてガイドブックを使用したことにより「理論編」「実践編」がつながりをもたらし、研修会の講師の意見として、運営のしやすさ、説明のしやすさが報告された。研修会、そしてテキストとしてのガイドブックが一つのパッケージとして評価されたものと思われた。さらにはガイドブックが仲介役となり、研修会、ガイドブック、HPの横のつながりが持てたことも評価された。来年度もこのコンセプトは大切にしながらガイドブックの作成を進めていきたいと考えている。

来年度のガイドブックについては報告書の附録としてガイドブックを作成し、HPに公開する方針である。研修会用のガイドブックとしては本年度のものを印刷して使用しつつ、「バレーボール」「サッカー」以外の単元に関するガイドブックの執筆を進めてコンテンツを積み上げていく予定である。その際、ガイドブックとHPをリンクさせることをより意識していきたいと考えている。来年度のことを考えるとHPよりもガイドブックが少し先行しながら進めていく方向性も考えていかなければならない。将来的には積み上げたコンテンツをまとめて出版することも視野に入れていきたい。

## 5) まとめと今後の課題

既述の調査結果およびWGでの議論を踏まえ、次年度以降のガイドブック作成にあたっては次のような方針が示された。

### ①まとめ

#### ①-1 構成・内容について

- ・理論編と実践編の2部構成とする。
- ・シンプルな内容とし、アダプテッド（HP）の入り口を目指す。
- ・実践編は障害種ごと（視覚障害、聴覚障害、知的・発達障害、肢体不自由）に作成

する。

- ・実践編の内容は学習指導要領を意識して單元ごとにまとめる。
- ・実践編においては、見開き（2 ページ分）で全体が完結できるよう努める。
- ・実践編は分量的には多過ぎず、レベルや表現などは専門的になり過ぎない範囲を目指す。

#### ①-2 ガイドブックの執筆について

- ・来年度のガイドブックについては報告書の附録としてガイドブックを作成し、HP に公開する方針である。
- ・研修会用のガイドブックとしては本年度のものを印刷して使用することとする。
- ・「バレーボール」「サッカー」以外の單元に関するガイドブックの執筆を進めてコンテンツを積み上げていく。
- ・アダプテッドに精通している専門家、現場教員に執筆を依頼する。
- ・ガイドブックWGがコーディネートして全体のバランスと取りつつ、編集を行っていく。

#### ①-3 その他

- ・研修会、ガイドブック、HP の繋がりを大切に、連携を強めながら活動できるとよいと考えている。

#### ②今後の課題

- ・執筆者の謝金をどのように保障するのかという点は課題である。
- ・「アダプテッド」という用語について否定的な意見が一部見られたため、プロジェクトとしては今後も検討していきたい課題の一つと考えている。

## 4-4. 広報 WG

### 1) 活動概要

広報 WG は、国内における「アダプテッド」の社会的周知を目的に、「アダプテッド」の用語と意味を広くアピールするとともに、体育・スポーツの指導者がアダプテッド体育・スポーツの具体例を知る情報源として、①アダプテッド体育に関するホームページ（以下 HP と記す）の構築と、②その媒体を活用した宣伝・相互リンク事業を目標としている。今年度は主に、昨年度試行的に構築された Jimdo®の無料作成ウェブページを使った HP のコンテンツについて、①ガイドブックとの整合性を図りながら、定着研修会で紹介、閲覧してもらえるように内容を充実すること、②作成した内容に対するフィードバックをもとに HP コンテンツの作成と編集、更新のマニュアルを作成することを優先的な課題として活動した。この課題を達成するために不可欠である動画編集や HP 編集の技術に長けた者を WG メンバーに新たに加え、年間 6 回の WG ミーティングを開催、検討を重ねるとともに、定着研修会 WG とガイドブック WG との連携を密にした。結果として、コンテンツの対象学年、障害の種類、種目を絞り込み、それぞれの障害の特徴に合わせて、ガイドブックの内容と整合させながらアダプテッドした活動例を紹介する動画を作成し、HP で公開した。また、HP は 2 月の定着研修会で参加者に紹介された。今後の継続的な HP の拡充と維持のための課題として、HP のコンテンツ作成者の増加、動画編集および HP 更新のための費用、HP を紹介する機会の獲得と HP に関するアンケート調査の実施があげられた。また、昨年度からの筑波大学特別支援教育連携推進グループとの連携を継続していく必要がある。

### 2) 活動目標

国内における「アダプテッド」の社会的周知を目的に、「アダプテッド」の用語と意味を広くアピールするとともに、体育・スポーツの指導者がアダプテッド体育・スポーツの具体例を知る情報源として、①HP の構築と、②その媒体を活用した宣伝・相互リンク事業を目標としている。今年度は主に、昨年度 Jimdo®の無料作成ウェブページを使って試行的に構築された HP のコンテンツについて、ガイドブックの内容との整合性を図りながら、定着研修会で紹介し、閲覧してもらえるよう内容を充実すること、HP コンテンツ作成と編集、更新のマニュアルを作成することを優先的な課題として活動した。



### 3) WGメンバー

本事業目標を達成するため、動画編集やHP編集の技術に長けた者をWGメンバーに新たに加え、HPの構成とコンテンツについて検討を重ねた。メンバーは以下のとおりである。

今城 遥（聖カタリナ大学人間健康福祉学部 助教）

宗田 光博（埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園 教諭）

重藤誠市郎（東海大学体育学部 非常勤講師）

吉岡 尚美（東海大学体育学部 教授）

澤江 幸則（筑波大学体育系 准教授） オブザーバー

### 4) 活動内容

#### ① HPコンテンツの拡充と公開

WGで検討を重ねるとともに、実行委員会での意見、定着研修会WG・ガイドブックWGとの情報交換をふまえ、広報戦略方針として、定着研修会とガイドブックで学んだ内容を具体化、視覚化し、理解を深める手段としてHPを活用することとした。今年度は、対象学年を「小学生高学年」、対象の障害を「肢体不自由」、「聴覚障害」、「知的・発達障害」に絞り込み、学習指導要領を参考に「バレーボール」と「サッカー」をアダプテッドした具体例の動画を作成した。具体的には、コンテンツ作成メンバー3名がそれぞれ一つの障害を担当し、アウトラインに沿ったパワーポイントスライドと活動例の映像を作成した。その後、動画編集担当メンバー1名により、音声、字幕、アレンジの編集がなされ、HP (<https://adaptedproject.jimdofree.com/>) に公開された (図 4-4-1)。



図 4-4-1. トップページ

## ・HPのサイト構成

HPのサイト構成は、作成中（工事中）の内容も含め、図4-4-2のとおりである。

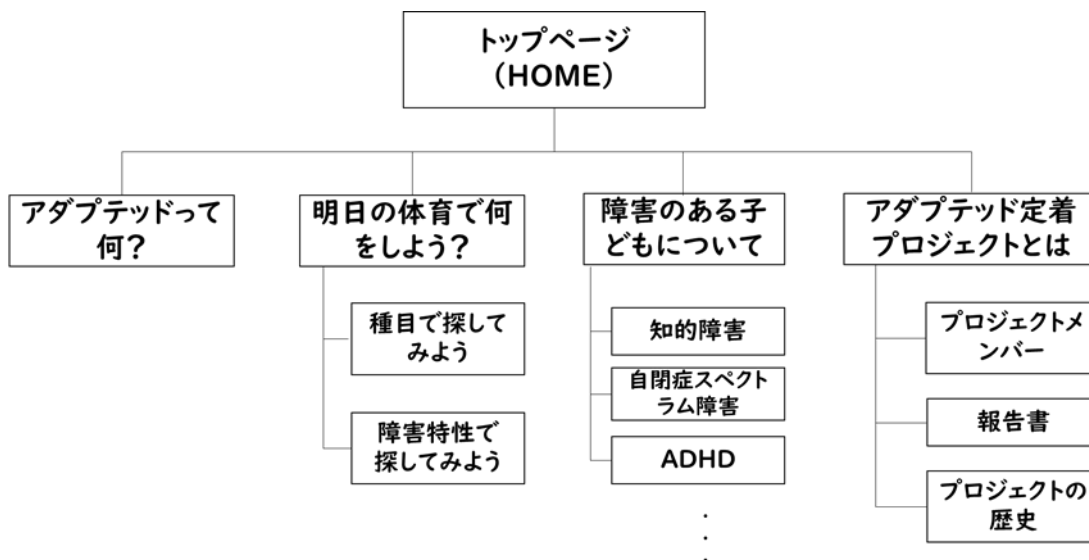


図4-4-2. サイト構成

## ・コンテンツ作成のアウトライン（ひな型）

HP内で統一感を持たせるために、コンテンツ作成用スライドのアウトライン（ひな型）を作成した（図4-4-3）。ひな型は、①表紙、②小学校学習指導要領解説抜粋、③小学校学習指導要領に記載されている「運動が苦手な児童への配慮の例」の引用、④ガイドブックと整合させた困り感の説明、⑤アダプテッドした活動例の紹介、⑥活動例の映像、⑦工夫の効果と考えられる問題、⑧課題の解決方法・追加の提案や情報とし、各担当者で必要な内容を適宜追加することとした。このひな型をもとに、聴覚障害のバレーボール（1例）とサッカー（1例）、肢体不自由のバレーボール（1例）とサッカー（1例）、知的・発達障害のバレーボール（2例）とサッカー（2例）の合計8つの動画を作成し、公開した（図4-4-4）。また、HP画面のデザインも、より検索がしやすくなるように新しくした。

①

## 知的・発達障害のある児童生徒がいる 体育授業の提案

### — ボール運動 ゴール型 サッカー編 —

③

ア ゴール型  
ゴール型では、その行い方を理解するとともに、送る、蹴る、止める、運ぶ、手渡しといったボール操作とボール保持者からボールを受け取ることでできる場所に動くなどのボールを持たないときの動きによって、攻撃側にとって易しい状況の中でチームの作戦に基づいた位置取りをするなどの攻守入り交じった簡易化されたゲームや陣地を取り合う簡易化されたゲームをすること。

- 【例示】
- バスケケットボール、サッカー、ハンドボールなどを基にした簡易化されたゲーム（攻守が入り交じって行うゴール型）
    - ・ 近くにいるフリーの味方にパスを出すこと。
    - ・ 相手に撞られない位置でドリブルすること。
    - ・ ボール保持者と自己の間に守備者が入らないように移動すること。
    - ・ 得点しやすい場所に移動し、パスを受けてシュートなどをする。
    - ・ ボール保持者とゴールの間に体を入れて守備をすること。
  - ◎ 運動が苦手な児童への配慮の例
    - ・ 得点しやすい場所に移動し、パスを受けてシュートなどをするのが苦手な児童には、シュートが入りやすい場所に目印を付たり、ボールを保持した際に最初にゴールを蹴ることを教習したりするなどの配慮をする。
    - ・ ボール保持者とゴールの間に体を入れて守備をすることが苦手な児童には、特設ゴールの位置を蹴るようにするなどの配慮をする。

② 小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 体育編

体育科の内容構成は次表のとおりである。

学年	1・2	3・4	5・6
種	体づくりの運動遊び	体づくり運動	
	器械・器具を用いた運動遊び	器械運動	
	走・跳の運動遊び	走・跳の運動	陸上運動
	水遊び	水泳運動	
域	ゲーム		ボール運動
	表現リズム遊び	表現運動	保健

ゴール型（バスケ、サッカー）  
ネット型（ソフトバレーボール）  
ベースボール型（ソフトボール）  
ハンドボール、タグラグビー、フットサルなどでも可。  
ベースボール型は誰でも可

④

知的・発達障害がある対象児がもつ困り感

**不器用さがあり、ボールを上手に蹴ることができない**

「発達性協調運動障害」(Developmental Coordination Disorder: DCD)では、スポーツに参加するために必要な、体のいろいろな部分を協調して動かす技能を獲得するのが、著しく遅れていたり、運動を遂行することができても、動きが遅かったり、不正確だったりするという特徴がある(菅原,2017)。

ボールをタイミングよく受けたり、蹴ったりすることに困難さがある。

⑤

ボールを上手に蹴ることができない場合のアダプテッド

#### バランスボールサッカー

- 用具：バランスボール  
コート：通常の体育で使用するコートの大きさ  
屋内・屋外でコートを小さくすることもO  
人数：3人×3人～5人×5人程度（コートの大きさに合わせて調整）  
工夫
- ①サッカーボールの代わりに大きなバランスボールを使って蹴りやすくする。
  - ②ゴールは通常の大きさ、またはコーンなどで簡易ゴールをつくってもO。
  - ③キーパーを置かないことで、ゴールに入れる楽しさをつくることもできる。
  - ④少しぐらいボールが手に当たってもOK！手に当たる回数の上限を作ってもO。

⑥ 映像

バランスボールサッカーの映像

⑦ 工夫の効果

- ①ボールが大きくなって蹴りやすくなる
- ②通常のサッカーよりもボールの動きがゆっくり
- ③人数を少なくするとボールに触れる機会も多くなる
- ④ゴールキーパーを置かないと、ゴールが決まる楽しさも増える



⑧

課題解決方法や追加の提案や情報など

図 4-4-3. HP コンテンツスライドのアウトライン（ひな型）



図 4-4-4. アダプテッドの活動例紹介ページ

#### ・ YouTube チャンネルの開設

より動画へアクセスしやすくするために、YouTube チャンネル (<https://adaptedproject.jimdofree.com/>) を開設するとともに、動画のショートバージョンも作成し、アダプテッドの活動例が短い時間で閲覧できるようにした。

#### ・ 「アダプテッドって何？」の修正

昨年度公開した「アダプテッドとは」の紹介動画を、活動例のデザインと統一し、新たに音声と字幕を付けたものに編集した (図 4-4-5)。



図 4-4-5. アダプテッドって何？

・ HP の宣伝活動（定着研修会での紹介とアンケートの実施）

今年度拡充した HP の宣伝活動として、HP を紹介するチラシ（図 4-4-6）を作成し、2 月の定着研修会で参加者に配布、紹介してもらうとともに、内容に関する Web アンケート調査（図 4-4-7）を依頼した。HP の閲覧と Web アンケートへの回答は研修会の時間外で任意とした結果、参加者から回答を得ることができなかった。



図 4-4-6. HP 宣伝チラシ

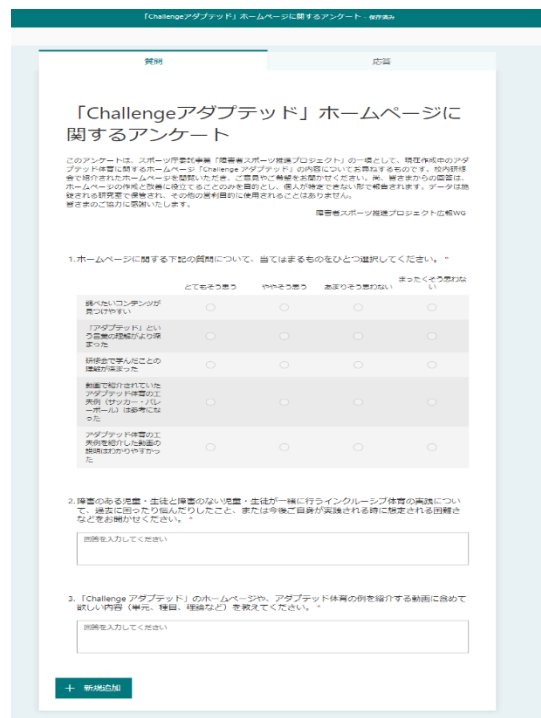


図 4-4-7. Web アンケート調査

## ② マニュアルの作成

HP のコンテンツ作成、編集、更新作業のニュアル（初稿）の作成を開始した。具体的な内容（目次）は、以下のとおりである。

1. ホームページについて
  - 1) 目的
  - 2) サーバーとサブドメイン
  - 3) サイト構成
2. コンテンツ作成方法
  - 1) アダプテッドって何？
  - 2) 明日の体育で何をしよう？
  - 3) 障害のある子どもについて
  - 4) アダプテッド定着プロジェクトとは
3. コンテンツの更新方法
4. YouTube
  - 1) アカウント
  - 2) アップロード方法

## 5) まとめと今後の課題

昨年度の課題として、HP のコンテンツ作成、編集、更新の作業と手続きに伴う負担（エフォート）を導き出すことが示された。今年度の作業工程から、HP のすべてのコンテンツを本 WG 内だけで作成し、編集、更新することは困難な現状が明らかとなった。このことから、今後の課題は、継続的に HP を拡充し、維持するために必要な人材と費用を獲得するとともに、HP の宣伝と活用を広めることである。具体的には、まず HP コンテンツの作成者を増加する必要がある。HP のコンテンツは、①「アダプテッド体育」の理論、②障害や種目別の具体的なアダプテッドの活動例、③障害のある子どもに関する説明、の 3 つのテーマがあり、今年度は②の拡充を優先的に行った。今後、②の内容をさらに拡充するとともに、①と③の内容も充実させていくためには、ガイドブック執筆者や今年度含めることができなかつた障害種別（視覚障害など）に精通した人材を確保し、コンテンツの作成を依頼することが必要になると考える。また、動画の編集、HP の更新・編集のための作業と手続きに必要な費用がある。動画を編集する作業や HP の管理をアウトソーシングする方法を検

討するとともに、Jimdo®と音声アプリケーションの有料版へのアップデートにかかる費用、ならびに人件費を捻出する必要がある。

次に、今年度拡充した HP を宣伝する手段を確保する必要がある。今後開催されるアダプト体育の定着研修会でチラシを配布するとともに、HP を教材のひとつとして活用するように依頼し、現在の定着研修会 WG と引き続き連携していくことが望まれる。また、今年度回答が得られなかった Web アンケートを実施し、コンテンツに関するフィードバックを得ることが必要である。加えて、筑波大学特別支援教育連携推進グループとの連携を維持発展していけるよう、今年度作成、公開した HP の動画コンテンツを上記グループのデータベースに申請する手続きを進める。

## 参考資料

文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 体育編、

[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017\\_010.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_010.pdf)

## 5. 本プロジェクトにおける将来計画

2030年の最終目標を達成するために実施した第1期3年計画（2019年度-2021年度）が完遂された。この3年間で、アダプテッドを教員に定着するための定着研修会プロトタイプをもとにした多様な研修タイプの効果の一例の効果を明らかにするとともに、その研修を通して、日常的にアダプテッドを実践するためのガイドブック内容の選定およびHPの構築を成し遂げることができた。

そこで我々は、つぎの3年間の計画に進むことができる。すなわち第2期3年計画（2022年4月-2025年3月）である。第1期で得られた、アダプテッドを定着するための研修会を実施するうえで核となるコア・カリキュラムと、それらを補完充足発展させるための教材コンテンツが載っているガイドブックやHPのフレームをもとに、次の3年間では、全国「大都市」に該当する20都市（大阪、名古屋、京都、横浜、神戸、北九州、札幌、川崎、福岡、広島、仙台、千葉、さいたま、静岡、堺、新潟、浜松、岡山、相模原、熊本、総務省,2010）と東京都において、年間1回以上の定着研修会を実施することを目標とする。そのうえで2022年度は、まずは全国を6ブロックの地域（北海道・東北ブロック、関東ブロック、中部ブロック、関西ブロック、中国・四国ブロック、九州・沖縄ブロック）に分け、地域の小学校教員を主な対象に定着研修会を年に1回実施し、地域条件における実施上の問題と課題を明らかにするとともに、各地域の核となる人材および組織づくりが求められる。そして学校教育現場でアダプテッドを日常的に実践できるための教材コンテンツの企画および開発を行わなければならない。例えば、ガイドブック第2版の公刊、ガイドブックと連動したHPコンテンツの構築などが重要な課題となるであろう。

そして、本事業を効果的に展開するためには、最終目標の達成に向けて自走するための検討が必要である。すなわち、この定着研修会を受けることによるインセンティブや研修会や教材コンテンツの管理、およびHPの運営などを行う組織のあり方、教員養成課程におけるカリキュラム提案等、将来構想について、現実的で実現可能性のある検討が必要である。



## 6. 附録資料

資料A：研修会 D（1.5 時間）の基本構造

# 研修会Dの基本構造

1

### 研修会D(1.5-2.0時間)で目指すところ

➢ これまでの経緯 (8/27 第2回定着研修会WG議事録より)

- インクルーシブな体育を中心とした研修会とし、対象は小学校の先生とする
- 内容は、例えば「自分が担当している通常級で、支援級の子どもも含めたインクルーシブな体育授業を行う場合にどうするか」という具体的な場面の解決につながる内容にしたい
- トライ&エラー、試行錯誤を続けることの大切さを実際に体験できるように、最低3段階(まずは自分で→その後グループで→他のグループの考えをもとにさらに再考など)の取り組みを確保する
- 障害児の体育の意義(「アダプテッド」と「インクルーシブ」の関係性)は冒頭に講義として入れる

2

### 定着研修会としての構造

時間	研修会としての行程	定着研修会としてのカリキュラム
30分 講義	障害児の体育指導の意義と理念 アダプテッドとは？インクルーシブとは？	障害児の体育指導の意義と理念
60分 演習	インクルーシブな体育実践 【演習①】「障害のある子どもがやってくる」 【演習②】「一緒にやってみる」 【演習③】「試行錯誤してみる」	インクルーシブな体育実践

3

### 研修会の内容

講義：障害児の体育指導の意義と理念(30分)

- 障害児体育の実態の理解
  - ・サラマンカ宣言、障害者の権利に関する条約
- インクルーシブ教育とは
  - ・インクルーシブ教育システム構築
  - ・体育におけるインクルーシブ教育の現状
- アダプテッドとは
  - ・アダプテッドの概念
  - ・具体的な考え方

4

### 研修会の内容

演習：インクルーシブな体育実践(60分)

【演習①】「障害のある子どもがやってくる」(約15分)  
内容：自分達のグループに、何らかの障害のある子どもがやってくる  
→ 個人およびグループメンバーで、どうやったら一緒にできそうかを考える段階

【演習②】「一緒にやってみる」(約20分)  
内容：障害のある子ども(の役の人)がグループにやってきて一緒に活動する  
→ 障害のある子ども(の役の人)を目の前にして、まずは実際にやってみる段階  
  
(グループごとに感想などを発表)

【演習③】「試行錯誤してみる」(約20分)  
内容：自分達で考えたことに加え他のグループの様子も参考にし、試行錯誤する  
→ 様々なアイデアを共有しながら工夫を繰り返す

扱う教材の例は次スライド↓↓

5

### 研修会の内容

演習：インクルーシブな体育実践(60分)

これまでの研修会で扱われた教材の例

- ◆ おにごっこ
- ◆ ポッチャ
- ◆ バレーボール
- ◆ キックベースボール
- ◆ 運動会種目(玉入れなど)

～参加する障害のある子ども(の役の人)～  
例えば、ポッチャに視覚障害のある子どもと一緒に参加する場合、「目が見えない」という状態だけでなく、実は「左耳が聞えない」などの様々な重複を想定し、グループ内でそれらに気づきながら試行錯誤するような活動に持っていきたい  
(@筑波大学の「おにごっこ」を参考に)

どのような教材を扱うにしても、その教材の「醍醐味」や「魅力」を確認し、その上でどのように「アダプテッド」するかを考えるように進める

6

資料 B : 研修会 D のためのテキスト (完成版)

別冊参照

本報告書は、スポーツ庁の委託事業として、筑波大学が実施した令和3年度「障害者スポーツ推進プロジェクト（地域の課題に対応した障害者スポーツの実施環境の整備事業）」の成果をまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要です。

